

ともに挑む。ともに実る。

MIZUHO みずほ銀行

2024年12月2日

みずほディーラーズアイ (2024年12月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 148.00 ~ 155.00

金融市場部 為替営業第二チーム 原田 脩平

■ 先月の為替相場

11月のドル/円相場は、米大統領選挙の結果を受けたトランプトレードによりドル高が進行するも、月末にかけて円に買戻しが入ると大きく値を下げた。

月初は151.98円でオープン。発表された米10月雇用統計が予想を下回ると一時151円台後半まで下落するも、売り一巡後に米金利が上昇する展開にドル円も153円付近まで反発。しかし、週明け4日のドル/円は上値重く推移すると、6日には一時151円台前半まで値を下げた。その後、米大統領選挙でトランプ氏優勢の報道を受けて154.70円まで上昇。7日も高値圏で推移するも、三村財務官の円安牽制発言により154円丁度付近まで反落した。週末にかけて、FOMCでの利下げ決定後も153円を挟んだ推移が続いた。

12日に米共和党が下院過半数を獲得するとの見通しから154円台まで上昇。その後も米金利上昇で154円台後半まで続伸。週央以降もドル高トレンドが継続するなか、14日にはパウエルFRB議長が「利下げを急ぐ必要はない。」と発言したため12月の利下げ期待が後退し、ドル/円は156円を突破。15日にはドル買いの流れで今月の高値の156.76円をつけるが、ポジション調整や米金利の低下を受けドル売りに転じると一気に153円台へと反落した。

18日に植田日銀総裁が講演を行い、日銀の利上げ観測が後退するとドル/円は155円台前半まで反発。19日にはロシア・ウクライナ間の地政学的リスクが高まり153円台前半まで下落するが、20日には同緊張が緩むと155円台後半まで急反発。21日には植田日銀総裁の発言を受け12月の日銀会合での利上げ観測が再び高まると153円台まで下落。22日に発表された本邦10月CPI発表を受けて154円台でのレンジ推移が続いたが、米11月サービス業PMIが高水準を記録すると154円台後半まで値を上げた。

月末週に入ると、トランプ政権の次期財務長官にベッセント氏が指名され、トランプ政権の財政拡張的な政策が抑制されるとの見方から米金利が低下すると153円台半ばまで軟化。翌26日にトランプ氏が中国に加え、メキシコ・カナダに追加関税を掛けると発言すると、ドル買いが強まり一時154円台ミドルレベルまで上昇。しかし、世界経済減速懸念からリスク回避の円買いが進むと153円割れまで反落。27日も感謝祭前でポジション調整によるドル売りが続くと、150円台半ばまで続落。28日は米国休場のため151円台でのレンジ推移となるも、月末には11月東京CPIが強い内容となったことや月末の円買いが持ち込まれると一時149.77円まで値を下げ、150円台前半で東京時間の取引を終えた。

■ 今月の見通し

今月のドル/円は、底堅い推移を予想する。今年の最も重要なイベントだった米大統領選挙を通過し、再び日米の金融政策に市場の注目が集まる。

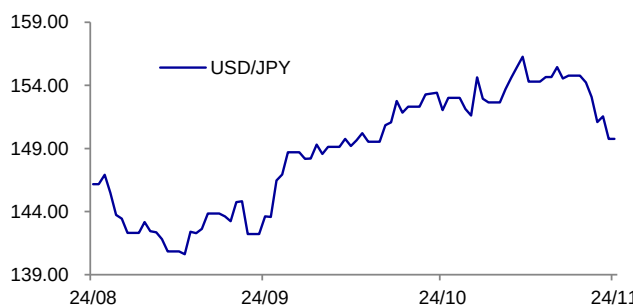
17日～18日に開催のFOMCでは、米雇用市場の堅調さから利下げ見送りを想定する。今月には6日に米11月雇用統計が発表されるが、先月発表の米新規失業保険申請件数等の雇用関連指標が示すように、足許の米雇用市場の底堅さが見られる。このような状況下で、11月の非農業部門雇用者数は20万人増加と予想されている。前回の米10月雇用統計はハリケーンやストライキの影響で非農業部門雇用者数の増加が市場予想を大幅に下回ったが、パウエルFRB議長は米10月雇用統計をハリケーンやストライキの影響が無ければ堅調だったという評価をしており、前回の結果は悲観するものでは無かった。また失業率に焦点を当てると、コロナ禍以降4%前後で推移しており直近の10月失業率4.1%という結果は決して悪い数字ではない。加えて、パウエルFRB議長の「利下げを急ぐ必要はない。」との発言や、一部FRB高官も利下げに慎重な姿勢を示している事も踏まえると、FOMC前も含めて利下げ織り込みが剥落した場合のドル高には注意したい。

一方、18日～19日に開催の日銀の金融政策決定会合では利上げ見送りを想定する。ただし経済や物価のデータが日銀の見通し通りに推移しており、足許では25bpの利上げ織り込みが進んでいる。仮に政策金利が0.5%になった場合、賃上げが不十分な状況で住宅ローン金利上昇などの影響から世論の反発が想定されるため追加利上げは慎重にならざるをえない。植田日銀総裁は10月会合後の記者会見で、「米国の新大統領が掲げる政策によって新たなリスクが出てくるため、その新たなリスクを会合で点検していきたい。」という発言をしている。注目のトランプ新政権は2025年1月20日(月)に発足するため、12月会合時点ではリスクを見極める時間が限られており、日銀の追加利上げは時期尚早であると想定する。

上記のように注目は集まるものの、今月の日米金融政策にはいずれも金融政策変更なしを予想。近年年末にはドルが軟調に推移する傾向があり、そのアノマリーには留意も今年の残されたイベントである日米金融政策を経て、日米金利差縮小が進行しなければドル/円は底堅い値動きとなることを予想する。

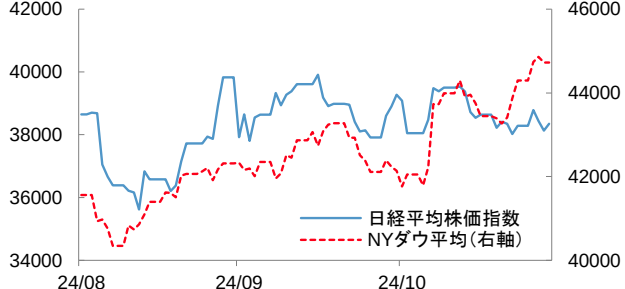
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	非農業部門雇用者数変化	10月	100k	12k	223k
11/1	失業率	10月	4.1%	4.1%	4.1%
11/1	ISM非製造業景況指数	10月	47.6	46.5	47.2
11/8	FOMC政策金利(上限)	-	4.75%	4.75%	5.00%
11/8	FOMC政策金利(下限)	-	4.5%	4.5%	4.75%
11/13	CPI(前年比)	10月	2.6%	2.6%	2.4%
11/15	小売売上高速報(前月比)	10月	0.3%	0.4%	0.8%
11/22	製造業PMI	11月	48.9	48.8	48.5
11/22	サービス業PMI	11月	55.0	57.0	55.0
11/27	PCE価格指数(前年比)	10月	2.3%	2.3%	2.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	9名	155.00 ～ 148.00	ベア	8名	153.00 ～ 145.75	※ レンジは中心値
宮地	ベア	153.00 ～ 145.00	直近数年は、年末にかけてドル安に推移する傾向が顕著。また、今月は日銀の動向に注目が集まりことから円が強含みやすい展開を予想。加えて、ユーロを中心にクロス円的大幅調整のリスクにも注意したいところ。			
河合	ブル	154.50 ～ 149.00	中旬に控える日米金融政策決定会合にかけて、米利下げ見送りと利下げベースの鈍化を市場が織り込んでいき、ドル円は反転上昇する展開を予想するが、ドル円の水準次第では、日銀金融政策決定会合での利上げが意識され、上値は限定的か。			
川端	ブル	155.00 ～ 149.00	11月後半のドル高の調整局面では、特に円の強さが際立った。しかしながら本邦CPIの伸び鈍化や、トランプ政策の不透明性を勘案すれば、利上げ期待を背景とする円買いは続かない。調整一巡後は緩やかな上昇基調回帰とみる。			
加藤	ベア	153.00 ～ 146.00	労働市場から顕在化してくると予想していた米国経済の陰りであるが、トランプトレードの陰に隠れてなかなかマーケットの狙い上へがってきていない。しかし足許のトランプトレードも、短い賞味期限と考えるべきではないか。			
山崎	ベア	152.50 ～ 147.00	日米金利差の縮小から、下方向を予想。BOJにより12月の利上げは実施されると予想。中旬にかけて下方向を予想する一方で、月末にかけては戻し、下値は限定的か。			
山口	ブル	155.00 ～ 148.00	Fedによる利下げ、日銀による利上げはすでに市場は織り込んでおり、あとは実施時期を見極める段階にある。12月に両国が政策変更すると一時的に円高に振れるが、日米金利差は依然として開いておりドルが選好される相場は継続。			
田川	ブル	156.00 ～ 149.00	現状ドル/円相場は調整を挟んでいるものの、①米経済指標はさほど悪くなく、景気悪化懸念が高まっていない、②トランプ次期政権の政策が明らかでない、③日銀利上げ観測が高まっていない、を考えれば再びドル高に戻る展開を想定。			
松永	ブル	155.00 ～ 148.50	月前半は日銀の利上げへの警戒から下値を探る動きもありそうだが、日米のファンダメンタルズの違いを踏まえれば、一方的な円高は想定しにくい。引き続きドル高地合いを想定する。			
上遠野	ブル	157.00 ～ 147.00	月上旬発表の米国雇用指標の堅調さやインフレ指標の粘性性を確認しつつ、FRBの利下げプロセスが鈍化する見通しが再燃か。日銀追加利上げ観測等で年末にかけて下押し圧力が予測されるも、前半の上昇幅を打ち消すほどは進まずと予想。			
大熊	ブル	155.00 ～ 147.00	一時のドル/円の騰勢は落ち着いたもののドル指数は未だ高水準にある。トランプトレードの巻き戻し以外にドル売り材料は見当たらず、米経済は底堅い中、第二次トランプ政権の発足が近づくにつれて反発する展開か。			
伊藤(基)	ブル	160.00 ～ 145.00	ここ数年、年末に向けては円高方向に推移することが多いものの、今年は第2次トランプ政権の誕生を控えていることを考えれば、ドル高に振れるとみている。米国以外どこの地域も元気がないだけに、ドル独り勝ちの師走となろう。			
范	ベア	151.50 ～ 145.00	日本について直近のインフレ関連指標が上振れしたこともあり、12月の日銀金融政策決定会合に向けて、利上げ期待の高まりから円買いに走りそう。また、12月はドル売りのアノマリーも傾向としてあり、上値重く推移すると予想。			
鈴木	ベア	152.50 ～ 145.50	先月末週の反応を見ると、トランプトレードの持続性には疑問を持たざるを得ない。日銀の利上げ期待も徐々に高まってきている状況下、上値の重い値動きを予想する。			
西	ベア	153.00 ～ 147.00	今月は日銀会合が焦点。足許インフレ指標は2%超であり個人消費も堅調である中、波乱がなければ利上げとの見方から徐々に織り込みが進むとみられ上値は重い。一方、一服したかに思われるトランプトレードの再燃には注意すべきだろう。			
原田	ブル	155.00 ～ 148.00	日米間の金融政策に注目。米FOMCの利下げと日銀の利上げは織り込みが進んでいるが、実施のタイミングは不透明な状況。予想通り米FOMCの利下げと日銀の利上げの結果になってもトランプ政権の政策への警戒から下値は限定的と見る。			
南野	ベア	154.00 ～ 147.00	現状、12月FOMCでの利下げ織り込みは60%程度。経済指標の結果が市場予想通りになればオントラックとの判断から利下げ期待は高まるだろう。一方、日銀の利上げの可能性もあるため、日米金利差縮小が今月は意識されそう。			
松木	ベア	153.00 ～ 145.00	米経済指標の結果次第でFOMC会合での利下げスキップやドットチャートが上方修正される場合には短期的に上昇を見込む。ただ、年内最後のイベントとなる12月日銀会合に向けては警戒感もあつてか円買いで反応しやすいか。			

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0250 ~ 1.0700
EUR/JPY 153.00 ~ 162.00

金融市場部 為替営業第二チーム 范 哲遠

■ 先月の為替相場

11月のユーロ/ドルはユーロ・ドル高が進み2022年以來の安値を付けた。月初のユーロ/ドルは1.0884で取引を開始し、その後1.08台後半を中心にレンジ推移した。翌週5日、独金利上昇が支援材料となり1.09台前半に上昇すると6日に一時月高値となる1.0937を付けた。ただし、米大統領選挙の開票速報を受けた米株高や米金利の大幅上昇が嫌気され、1.0683まで急落。その後は米金利が低下に転じたことが下支えとなり、1.07台を回復した。7日、ユーロ圏9月小売売上高の良好な結果や米金利低下を好感し、1.08に乗せる展開となった。8日、米金利低下が重しとなり、軟調な動きが継続。週初11日、1.0713でオープンしたユーロ/ドルはドル買い相場の中で1.06台前半にじり安となった。12日、米金利上昇や独11月ZEW景気期待指数の弱い結果などが嫌気され、一時1.06を割り込んだ。13日、米10月CPI発表後には1.06台半ば上昇も、その後は米金利反発が重しとなり、1.05台半ばに反落。14日、ドル買い相場が続く中で、ユーロ圏9月鉱工業生産の冴えない結果を受けた独金利低下も重しとなり、1.0496まで下げ幅を拡大した。その後は、米金利低下が好感され、1.05台でのレンジ推移した。15日、複数の米経済指標の良好な結果を受けた米金利上昇からドル買いユーロ売りとなった。月後半に入ると、1.0536でオープンしたユーロ/ドルは米金利低下が好感され、1.06付近までじり高となった。19日、ウクライナ情勢緊迫化によるリスク回避のドル買いの動きや独金利低下を嫌気し1.05台前半まで下落も、その後は戦況悪化に対する懸念が後退すると1.05台後半に反発し、往々来いの展開になった。20日に一時1.0610を付けるも、独10月生産者物価指数の冴えない結果が重しとなり、1.05台前半に反落。さらに21日、米金利上昇が重しとなり1.0462まで急落、翌22日もユーロ圏11月PMIが50を下回るとリセッションが意識されるとユーロ売りが加速し、一時今月の安値となる1.0332まで下落した。最終週の25日、1.0480でオープンしたユーロ/ドルは米金利低下が下支えとなり一時1.05台に乗せるも、ドルの買い戻しもあって1.05を割り込んで引けた。26日、トランプ次期米大統領による追加関税案への警戒感から一時1.04台前半まで下押し。その後は、米金利の上下に振られる展開の中、1.05を挟んだレンジ推移となった。27日、シュナーベルECB専務理事によるタカ派的な発言を受けた独金利上昇や米金利低下を好感し、1.05台後半に上昇した。28日、米国休場で薄商いの中で、1.05台半ばを中心とした狭いレンジ内でのみ合い推移に終始した。29日、前日の米国休場に続き、取引時間短縮されている中、方向感に乏しい展開となった。

■ 今月の見通し

12月のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想する。

金融政策についてみるとECBは前回の10月の理事会において25bpの利下げを実施。10月31日にラガルドECB総裁は「利下げの幅と時期は今後数週間及び数カ月の経済データによって決定される」との考えを示しており、FEDや日銀同様、データの良し悪しを基に金融政策が決定されるライブ会合となる。足元、次回の12月理事会は25bp利下げがメインシナリオとなっている。11月22日に発表されたユーロ圏11月総合PMIは好況不況の目安である50割れまで低下。欧州経済の牽引役であるドイツやフランスを中心とした欧州圏について景況感悪化が懸念され、一部の市場参加者には50bp利下げを織り込む動きも出てきている。

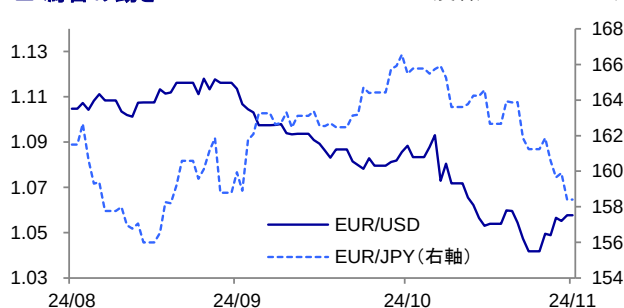
一方、FEDについては12月FOMCで金利据置きまたは25bp利下げで予想が分かれている。11月14日にパウエルFRB議長は「経済は利下げを急ぐ必要性についていかなるシグナルも発していない。現在、我々が目にしている経済の強さにより、慎重な決定を行うことが可能となっている。」と利下げに対して慎重なスタンスが確認された。欧米共に緩和フェーズは変わらないが、ファンダメンタルズをみても米国対比弱い欧州は緩和スピードがより速いものとなる。為替も金融政策の違いから、ユーロはドルに対し軟調な動きで推移していくものと考えられる。

政治面・地政学面でもユーロが売られやすい状況は変わらないとみる。まず、トランプ次期大統領の政策において、貿易相手方への関税引き上げが検討されている。米国から欧州への直接関税は勿論、中国に対する関税強化も経済的繋がり強い欧州への影響度は高い。当政策について現実味を帯びてくるようであれば、欧州の実経済に対する下振れ圧力となり、ユーロ売りが連想されよう。

一方、ドイツ・フランスの政局を巡る不透明感も燃える。ドイツは11月6日にシュルツ連立政権が崩壊。シュルツ氏の社会民主党と緑の党が大規模な財政出動を唱える一方、自由民主党は財政規律の堅持を主張しており、対立が続いていた。年内は少数与党となったシュルツ政権の下、政策のハードルは高くなっている。地政学リスクではロシア・ウクライナ情勢の緊迫化、イスラエル・ヒズボラの停戦を巡る行方も注目されたい。状況が悪化するようであればリスクオフから欧州株下落・独金利低下・欧州通貨売りに繋がりやすいだろう。

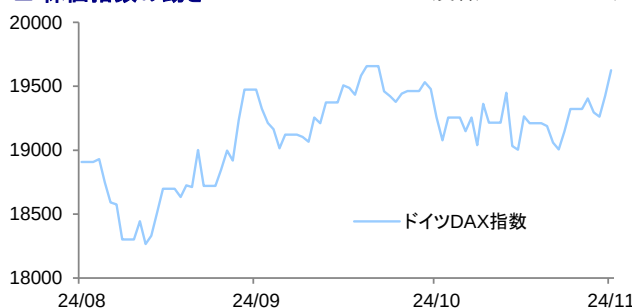
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/4	ユーロ圏製造業PMI	10月	45.9	46.0	45.0
11/12	独ZEW景気期待指数	10月	13.2	7.4	13.1
11/14	ユーロ圏GDP(前年比)	3Q	0.9%	0.9%	0.9%
11/19	ユーロ圏CPI(前年比)	10月	2.0%	2.0%	2.0%
11/22	ユーロ圏製造業PMI	11月	46.0	45.2	46.0
11/25	独IFO企業景況感指数	11月	86.0	85.7	86.5
11/29	ユーロ圏CPI(前月比)	11月	-0.2%	-0.3%	0.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	2名	1.0775 ～ 1.0350	ベア	15名	1.0700 ～ 1.0300	※ レンジは中心値
宮地	ベア	1.0700 ～ 1.0100	年末はドル安進行とのアノマリーに留意も、鈍化傾向の強い独経済状況やウクライナ情勢・仏政局等など材料を踏まえるとユーロは買いづらい。また、トランプ政権誕生前の新政策に関する報道もユーロ売り材料として機能しよう。			
河合	ブル	1.0800 ～ 1.0350	欧州の景況感悪化、地政学リスク、独仏政治不安、欧米の利下げ期待ギャップとユーロ売り材料には事欠かない状況が続くが、10月からのユーロ安進行は急ピッチすぎることもあり、一旦は1.05近辺で揉み合う展開を予想。			
川端	ベア	1.0700 ～ 1.0200	仏の財政懸念は局所的な印象だが、トランプ政権による欧州への関税懸念は域内の景気見通しに中期的にネガティブ。中立金利を巡る当局の見方には幅があり、12月理事会に向けて思惑的にもユーロは売られやすい状況が継続。			
加藤	ベア	1.0700 ～ 1.0400	依然欧州と米国のファンダメンタルズ格差は大きい。したがって調整が入ってたとしても両経済圏の格差が明確な以上、ユーロの上値は重いままであると考える。			
山崎	ベア	1.0650 ～ 1.0350	下方向を予想。欧州圏は地政学リスクの他、政治的なリスク等も勘案すると、引き続きEUR売りが想起される。11月にすでに下方向へ進んでいることから、これ以上の下値は限定的か。			
山口	ベア	1.0700 ～ 1.0300	欧州圏の経済は低迷が続いており、さらにインフレの鈍化も確認されてきたことでECBは利下げサイクルを継続すると予想。引き続き政治リスクも燦る中、ユーロは軟調推移継続を予想する。			
田川	ベア	1.0750 ～ 1.0200	域内経済は弱含み、トランプ関税や、独政局不安などネガティブな材料に事欠かない。次回ECBで一部で▲50bpの利下げ予想も聞かれ、欧-米金融政策差もコントラストがつく。ユーロはすでに大きく下げてはいるが、底打ちはまだ先か。			
松永	ベア	1.0600 ～ 1.0200	地政学リスク、政治リスク、景気後退リスク等、欧州に弱気材料が並ぶ中、上値の重い展開を予想。節目となる1.04を再び割り込む場合には売りが加速する可能性も想定。			

上遠野	ベア	1.0680 ～ 1.0300	ドイツ、フランスを中心にユーロ圏の政治不安や、景気減速・デフレーション進行を背景にECB利下げプロセスの着実な実施を受けユーロは重い値動きを継続するものと想定。
大熊	ベア	1.0700 ～ 1.0300	欧州の景気不安により早期のインフレ収束の可能性が高まっている。緩やかな利下げが支持される中、12月のECBでは大幅利下げ観測が浮上していることもあり、ユーロは下値を試す展開を予想。
伊藤(基)	ベア	1.0750 ～ 1.0100	経済、政治、どちらを見ても先行きに対する不安感が急速に強まっており、ユーロを積極的に買う理由はどこにもない。こうした状況下ではECBの利下げペースも加速する可能性は十分にあるだけに、パリティ割れもそう遠くはなさそう。
范	ベア	1.0700 ～ 1.0250	欧米についてみると景況感悪化が懸念されている欧州は個人消費が底固く、ソフトランディング期待が高まっている米国に対して通貨も弱含むと予想。
鈴木	ベア	1.0700 ～ 1.0400	ドイツの製造業を中心とした景気減速が顕著で、インフレも順調に鈍化しており、利下げのしやすい環境が整っている。緩和見通しが依然不透明な米国との金融政策差がはっきりしており、軟調な推移が基本線。
西	ベア	1.0700 ～ 1.0300	ECB会合での利下げは規定路線。欧州圏経済は従前より軟調であるが、トランプ関税が更なる重石となり景況感は悪化しやすい。独政局不安も重なる中、欧米格差は明白であり、上値の重い推移を想定。
原田	ベア	1.0700 ～ 1.0300	ロシア・ウクライナ情勢の悪化や独・仏の政治不安等が重なり、欧州情勢への不安が高まっている。米FOMCの利下げは不透明な状況であるが、ECBの利下げ織り込みは進んでおり、ユーロが売られやすい状況が続くと予想。
南野	ブル	1.0750 ～ 1.0350	強いドルと弱いユーロで対立構造ができ、軟調推移しているがやや行き過ぎだろうか。ユーロに押し目買いが入り、底堅く推移するだろう。ECBの利下げは既定路線で、FOMCで利下げを決定すれば上昇圧力となるだろう。
松木	ベア	1.0800 ～ 1.0300	トランプトレードに伴うドル買いは一服するだろうが、年内は継続が見込まれるロシア・ウクライナ間の地政学リスク、独等の不透明な政治情勢、ユーロ圏の景況感の弱さなど鑑みて、ユーロの反発は限られよう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2300 ~ 1.2900
GBP/JPY 184.00 ~ 196.00

欧州資金部 天沼 幹

■ 先月の為替相場

先月のポンドは対ドルで下落。6日、ロンドン時間早朝にトランプ氏勝利の報道が流れ、全体的なドル高が始まる。翌7日はBOEが予想通り8vs1の投票で▲25bps利下げを発表。新予算がインフレリスクになる旨のコメントとともに見込みの上方修正もなされたことで先物市場の12月利下げ観測が後退した。続いてFOMCも予想通り▲25bpsの利下げが発表された。20日、英10月消費者物価指数(CPI)がヘッドライン、コア、サービスすべてで市場予想を上振れると英利下げ織り込みが後退した。英ポンドは全体的にドル高環境の中で底堅く推移し、対ユーロでは大きく上昇した。サービスについては市場予想は上回っていたもののBOEの予想とはインラインであった。インフレ要因のレクリエーション項目は前月比で下落したものの、それを飲食や教育の上昇が打ち消す内容だった22日は英11月PMI(速報)が発表され、製造業、サービス、総合すべてで市場予想を下回る結果となった。CPIとは対照的な結果に、地政学要因のリスクオフによって下落していたポンドはさらに底値を掘る展開。スワップ市場を確認すると、CPIの発表前のレベルまで利下げ織り込みが戻った。月末にかけては米感謝祭もあり、ポジションアンwindによるドル安となった。

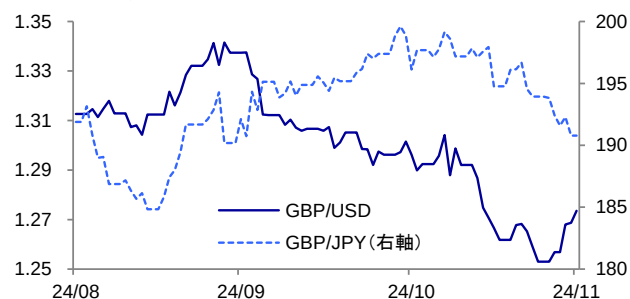
■ 今月の見通し

今月は米英の政策金利発表があり、それまでに発表される経済指標の結果によって上下両側のリスクに晒される。特にスワップ市場によると利下げの織り込みは不透明感を示している。注目の米指標といえば、2日、4日発表の米11月ISM製造業/非製造業指数、6日発表の米11月雇用統計、11日発表の米11月CPI。現状のところ底堅いデータが散見されている。例年12月はドルが売られるアノマリーがあるものの、前回トランプが勝利した16年はドル高となった。英指標では、16日発表の英12月PMI(速報)と18日発表の英11月CPIだ。先月発表された英10月CPIは、主要項目であるレクリエーションは下落したものの賃貸や旅行関連、教育は底堅く市場予想を上回るアップサイドのサプライズとなった。ただしサービスについてはBOEの予想とインライン。現状、BOEメンバーの発言はいずれも注意深くハト派色は薄く、前回政策発表でも新予算案に関連してインフレ見通しを上方修正するなど警戒感を示している。足許のインフレは想定通りに動いているものの、予算案の影響がインフレ上昇圧力に寄与するリスクを考えると安易に利下げに踏み込めないという印象。その意味であまりに弱い内容が出ない限りは利下げは来年に持ち越され、見通しについてもデータ次第で英ポンドが急激に弱含む展開には今のところはならないように思う。英ポンドのダウンサイドリスクとしては、英11月PMIや英10月小売売上高が総じて弱含んでいるため、この流れが続くと25年における利下げ織り込みが先んじて進みポンド売りに傾く可能性がある。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

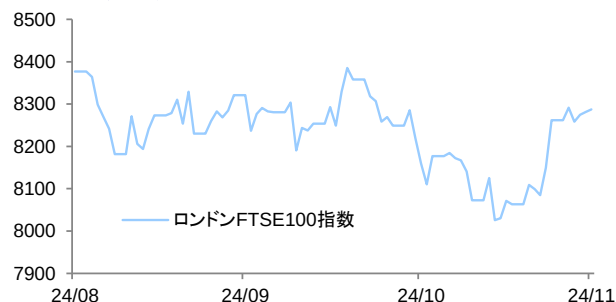
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
11/7	BOE政策金利
11/12	ILO失業率
11/20	CPI
11/22	サービス業PMI(速報)

(資料) ブルームバーク			
期間	予想	結果	前回
-	4.75%	4.75%	4.75%
9月	4.10%	4.30%	4.00%
10月	2.20%	2.30%	1.70%
11月	52	50	52

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6340 ~ 0.6590
AUD/JPY 98.00 ~ 101.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

■ 先月の為替相場

11月の豪ドルは0.66台後半まで上昇後、0.64台半ばまで低下。

第1週目、週末の世論調査でハリス氏優勢との報道を受け、4日はオープン直後からドル売りが優勢となり豪ドルは0.66台に乗せ。6日、米大統領選挙の投開票速報でトランプ氏優勢の報道が続き、広範なドル買いが進行し豪ドルは一時0.65台前半まで急落。売り一巡後は徐々に買戻しが入り、0.65台後半まで値を戻した。7日は前日急速に進んだドル買いの調整が優勢となり、月高値となる0.6687まで上昇。FOMCでは予想通り▲25bp利下げが決定され、声明文やパウエルFRB議長の会見は特段サプライズ無く反応は限定的であった。8日、材料難な中、米金利の上昇を背景に豪ドルは0.65台半ばまで急落。

第2週目、トランプトレードの継続から豪ドルは下値を追う展開に0.64台半ばまで下落。13日発表された豪7～9月期賃金指数が前年比・前月比ともに小幅に予想を下回ったことや、14日の豪10月雇用統計で事前予想に対して雇用者数の伸びが鈍化したこと、パウエルFRB議長の利下げに慎重な発言等も豪ドルの重しとなった。

第3週目、序盤、トランプトレードの利益確定と思われる動きを背景とした米金利低下を受け、0.65台まで水準を切り上げた。その後は、19日のタカ派的な内容のRBA議事要旨や、20日の米半導体大手企業決算などがサポート材料となったが、さらに上値を追う材料に欠け0.65台前半を中心にもみ合い。

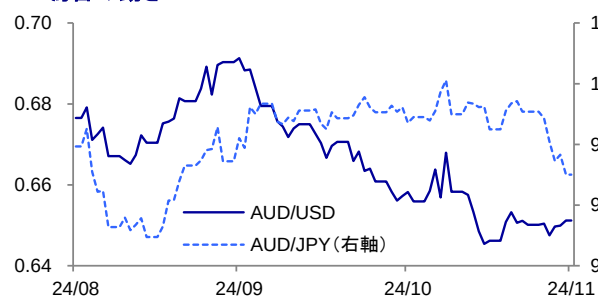
第4週目、25日、週末にベッセント氏の米財務長官指名が発表されたことを受けて、オープン直後からドル安の流れとなり、豪ドルは買いが優勢。抵抗線として意識される0.6550近辺まで上昇したが、弾かれて反落し0.65近辺まで下落。26日、トランプ次期米大統領が中国、カナダ、メキシコへの追加関税に関するコメントをしたことで豪ドルは0.64台前半まで下落後すぐに買い戻され往って来い。その後は0.65近辺でもみ合っている。

■ 今月の見通し

12月の豪ドルは底値固めを予想する。11月初旬は米大統領を巡る思惑に振られたが、トランプ氏の当選が確定すると、米利下げ織り込みが大幅に後退し、豪ドルは下値を追う展開となった。注目されていた財務長官のポジションにベッセント氏が指名されたことで、トランプトレードの一部が巻き戻されたが、翌日にはトランプ次期米大統領による関税表明(中国に対して10%の追加関税、カナダ・メキシコへ25%の関税をかけると表明)が伝わり、豪ドルは今年8月以来の安値を記録した。中国が最大の貿易国である豪州にとって、トランプ次期米大統領による中国への追加関税は非常に関心が高い話題であり、今後も同氏によるコメントを受けて市場が右往左往する展開が予想される。足元、トランプ米次期大統領の推し進める政策が注目されて米金利高・米ドル高が進行しているものの、豪州はコアインフレ率の低下に苦戦しており、RBAが利下げできる環境が整うのは来年半ば以降であると想定すれば、株価が年末にかけてラリーする中で、豪ドルは底堅い値動きをすると予想する。イスラエルとヒズボラの停戦により地政学リスクが軽減したことも豪ドルのサポート材料となろう。

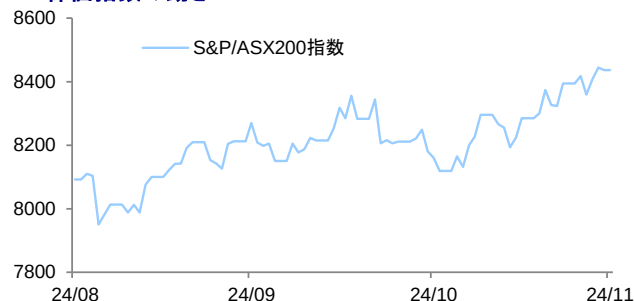
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/4	豪州準備銀行理事会	11月	4.35%	4.35%	4.35%
11/7	貿易収支 (A\$ mn)	9月	5,274	4,609	5,644
11/14	失業率	10月	4.1%	4.1%	4.1%
11/14	労働参加率	10月	67.2%	67.1%	67.2%
11/27	月次CPI (前年比)	10月	2.3%	2.1%	2.1%
11/27	月次CPIトリム平均値 (前年比)	10月		3.5%	3.2%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3800 ~ 1.4200
CAD/JPY 105.00 ~ 113.00

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ

■ 先月の為替相場

11月のUSD/CADの値動きに関しては、米大統領選がに大きな役割を果たした。トランプ氏が勝利したことからUSD/CADは2020年5月以降で初めて1.40を上抜けた。

11月上旬に公表されたカナダ中銀の10月会合議事録では、インフレ上昇圧力が引き続き低下する見通しを示した。米国で開催されたFOMC会合ではFEDが予想通り政策金利(上限)を4.75%に(25bps)引き下げた。1日に発表された10月S&Pグローバル製造業PMIは、カナダでは51.1と景況感の判断の分かれ目の50を上回ったが、米国では48.5と、前月同様50を下回った。同日、米国の10月非農業部門雇用者数が前月比伸びが鈍化し、失業率は前月と同水準となった。カナダ10月雇用者数(8日発表)も前月比大きく低下し、予想を下回ったが失業率は前月比6.5%で維持された。一方、これらの発表はUSD/CADの動きに大きな影響は与えなかった。

中旬には、米10月CPIが発表(13日)され、前月比では総合、コアともに9月と同じ結果となった。前年比では、総合は上昇したものの、コアは9月と同水準が維持され、いずれも予想と一致した。発表後USD買い優勢となったほか、12月のFOMC会合での追加利下げ観測が強まった。一方、19日に発表されたカナダ10月CPIは、総合、コアともに前月比と前年比上昇し、いずれも予想を上回った。その結果、市場における12月のBOC会合での大幅利下げの確率は若干後退し、USD/CADが下落した。

月末にかけて、ドナルド・トランプ次期米大統領は、米国への不法移民や麻薬密輸を取り締まるため、カナダ、メキシコに25%と中国に追加10%の新たな関税を課すと発表したことから、USD/CADは一時1.41台まで上昇した。この関税が実行された場合、米国ではインフレが加速し、利下げの確立は後退されると市場でみなされている。月末にはカナダで第3四半期GDP(11/29)の指標を控え、USD/CADは11/27現在、1.40台で推移している。

■ 今月の見通し

カナダ中銀の次回金融政策決定会合は12月11日に予定されている。カナダ銀行のメンデス副総裁は26日のプリンスエドワード島での講演で、ここ数年注目の的となっていたインフレ率は年率2%に戻り、長年困難の中にあった消費者や企業は自信を持って支出や投資ができるようになる」と述べた。11/27現在、市場では25bps利下げと50bps利下げとで見方が分かれている。カナダ10月CPIは前月比若干上昇したことから、金利市場では、次回、カナダ中銀会合において25bpsのみ(3.75%→3.50%)引き下げられるとの見方が若干優勢になっている。尚、12月11日の会合に先立ち、9月GDPや11月雇用統計など主要経済指標の発表が予定されている。

米国では、次回FOMC会合は12月18日に予定され、政策金利(上限)が4.75%から4.50%へと引き下げられると見方が強いが、一部、据え置きを予想するエコノミストもいる。11月7日に開催されたFOMC会合の議事要旨によると、FOMCは最大雇用を支援し、インフレ率を2%の目標に戻すことに強くコミットしていると示された。12月18日前には、カナダと同じく米国でも11月雇用統計、CPI、小売売上高など主要な経済指標の発表が予定され、FOMCは経済見通しに与えるこれらの影響を引き続き注視している。また、トランプ氏がカナダ、メキシコと中国からの製品に新たな関税を課すことになった場合、米国ではインフレが加速し、来年の利下げの確立は後退される可能性がある。

今月の相場見通しにおいては、米国とカナダの経済指標のほか、トランプ氏が発表する政策方針が注目され、両国のインフレとともに利下げ見通しにどの程度影響を与えるかが焦点になる。

USD/CADの下値としては1.3800、上値はほぼ5年間の最高値1.4170を上抜けるかどうか注目したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

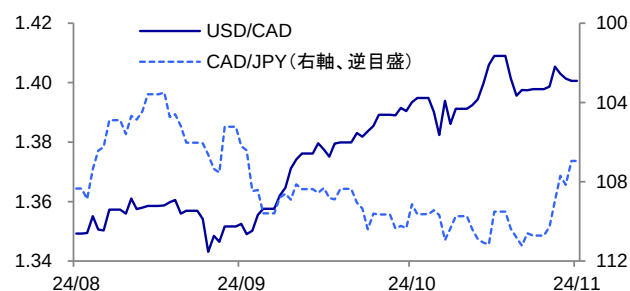
カナダの芸術は多様で活気に満ちており、多文化の人々によって形作られています。先住民族のアートから現代アートまで幅広いジャンルを扱っています。

ここトロントのダウンタウンに位置する北米最大級の美術館のひとつであるオンタリオ美術館(AGO)は、12万点を超える多様な芸術作品で知られる文化センターです。AGOには、カナダをはじめとする世界のアーティストによる歴史的、現代的な作品が数多く展示されています。美術館の常設コレクションには、グループ・オブ・セブンのような有名なカナダ人アーティスト、先住民アーティスト、有名な写真家の作品が含まれています。フィンセント・ファン・ゴッホをはじめとする世界の著名・新進芸術家の優れた作品を紹介する企画展を定期的に開催しています。また、トロントのグラフィティ・アレーには、Elicserやuber5000という有名なアーティストが作成した素晴らしい壁画やストリート・アートがいっぱいあります。グラフィティ・アレーは、トロントの合法化されたストリート・アートとの関わりが深まっている中心地です。

カナダの街を散策していると、いろんな素晴らしいアートインスタレーションに出会うことができます。バンクーバーのスタンレーパークで立てられたいくつかの部族のトーテムポールのレプリカや首都であるオタワに設置された「ママン」という巨大なクモのインスタレーション彫刻作品などが目を引きまします。

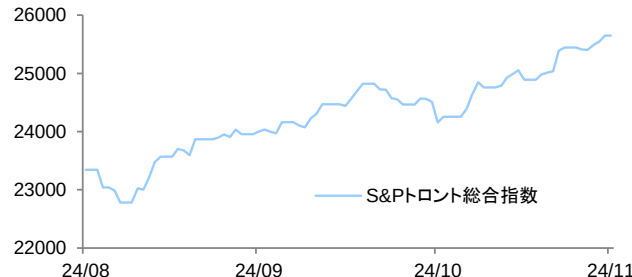
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	10月	-	51.1	50.4
11/8	雇用ネット変化率	10月	27.2K	14.5K	46.7K
11/8	失業率	10月	6.6%	6.5%	6.5%
11/12	住宅建設許可(前月比)	9月	3.2%	11.5%	-6.3%
11/18	住宅着工件数	10月	240.0K	240.8K	223.4K
11/19	CPI(前年比)	10月	1.9%	2.0%	1.6%
11/21	鉱工業製品価格(前月比)	10月	0.9%	1.2%	-0.8%
11/22	小売売上高(前月比)	9月	0.4%	0.4%	0.4%
11/29	GDP(前月比)	9月	0.3%	0.1%	0.0%
11/29	GDP(四半期/年換算)	3Q	1.1%	1.0%	2.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1370	～	1420
KRW/JPY	10.59	～	11.29
JPY/KRW	8.85	～	9.45

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

11月のドル/ウォン相場は上昇推移。

月初のドル/ウォンは1,375.5ウォンでオープンした後、米雇用統計、米大統領選、FOMCといったビックイベントを控えドル買いが拡大し、1,380ウォン付近まで上昇した。週末にかけてハリス氏の優勢が報じられたことから、これまでトランプ氏勝利を意識したトレードが若干巻き戻されドル/ウォンは弱含む場面も見られた。しかし、予想に反して6日早々に開票が進みトランプ氏の優勢が報じられると、再度米金利上昇とともにドル買いが優勢に。7日にトランプ氏の当選が確実となり、一時1,404.5ウォンまで急騰した。同日開催されたFOMCでは予想通り25bpの利下げが決定され、イベント通過から翌8日には1,380ウォン台まで水準を戻した。

しかし、翌週11日に再びウォンは軟調推移し1,395ウォン付近でオープン。中国景気不安やトランプ氏の勝利を受けて中国製品への関税が強化されるとの見方から人民元が軟調に推移し、ウォン安も連れ安となった。12日には再度1,400ウォンの節目を上抜け、13日に一時1,410.8ウォンの高値を記録。14日にチェ副首相から「金融市場のボラティリティが過度に拡大した場合には、積極的な市場安定化措置を適時迅速に実施する」と口先介入が行われ、15日にかけて1,400ウォンちょうど付近まで戻した。

翌週18日はトランプ・トレードに一服感が見えたことから1,390ウォン台で方向感乏しく揉み合い推移が続いた。週半ばにロシア-ウクライナを巡る地政学リスクが拡大するとリスクオフの動きからドル買いが優勢に。FRB高官からも利下げに慎重姿勢を示す発言が見られたことで21日にかけて再度節目の1,400ウォンを上回る動きに。しかし、1,400ウォン付近では当局による為替介入を警戒する動きから上値の重さが確認された。

翌週26日にトランプ次期大統領が中国への追加関税に言及するとウォン安が進行し一時1,407ウォン付近まで上昇したものの、その後27日にかけて1,390ウォン前半半まで戻した。28日のBOK会合では25bpの利下げが決定され、ウォンはやや軟調推移。1,395.6ウォンで引けた。(28日15:30時点)

■ 今月の見通し

12月のドル/ウォンは底堅い推移を予想。

11月28日のBOK会合では大方の予想に反して利下げが決定された。また、今年・来年の成長率見通し(前年比)を8月からそれぞれ▲0.2%ポイント引き下げて、今年は+2.2%、来年は+1.9%へと下方修正した。また、来年のCPI予想も▲0.2%ポイント引き下げて+1.9%とした。先月行われた会合で▲25bpの利下げを決定した後、李総裁は6人中5人の委員が今後3か月間政策金利を3.25%に維持すべきと考えている」と述べ金融緩和を急ぐつもりはないと示唆していたものの、この1か月余りの間に発表された第3四半期GDP成長率は低調で内需の弱さを補ってきた輸出にも陰りが見えていた。また、トランプ氏の大統領選勝利を受け、関税引き上げ等不確実性が増す中でサブプライムの利下げを決定した。一方で、為替レートは1,400ウォンを超える場面が散見されるほか、BOKが季節要因により増加したものの今後緩やかに減少するとしている家計負債も注意が必要な状況。ソウル首都圏の住宅価格は再上昇の兆しが見られている。

12月FOMC会合を残しているものの、今回のBOKの利下げ決定と来年の経済見通しの下方修正を受けて韓-米金利差の拡大から12月も引き続きウォン安圧力が継続するものと予想する。1,400ウォンを超える水準では当局による口先介入や市場参加者の為替介入への警戒感が強まり上値が重くなることが想定されるも、米トランプ政権への移行を控えドルは引き続き底堅い推移が想定され、ドル/ウォンは1,300ウォン台後半から1400ウォン台前半での値動きを予想する。

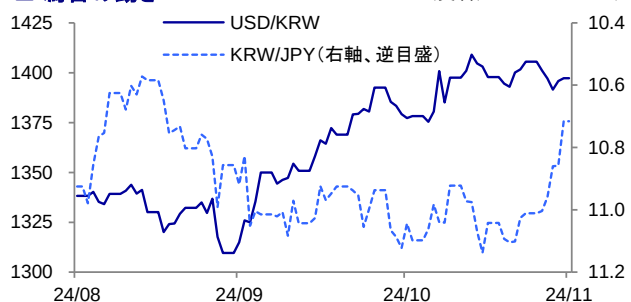
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

この時期に韓国のアート・芸術界の注目イベントとして、韓国国立現代美術館(MMCA)とSBS文化財団が主催する「今年の作家賞(Korea Artist Prize)」というものがあるそうです。韓国現代美術の発展に寄与するため、独自の道を切り開いてきたアーティストを発掘し支援する為に創設された賞で、1次審査を通じて最大4名までが受賞候補として選ばれます。毎年10月頃から翌年3月まで、これらの作家にフォーカスしたドキュメンタリーが制作され放送されたり、創作した作品の展示が行われ、2月に1名の受賞者が発表されます。作品は現代アートらしく映像系のものや、立体的な構造物のようなものもあるようで、教養を高めるべく見に行ってみたいと思います。

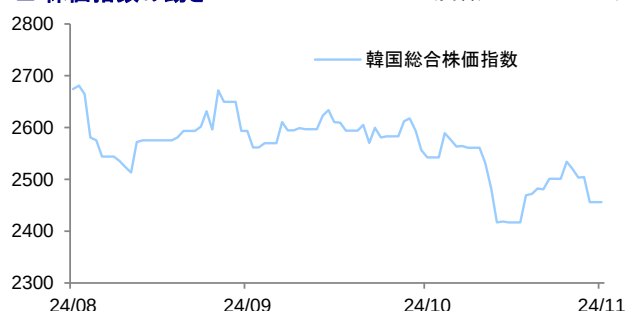
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	貿易収支	10月	4100M	3167M	6658M
11/1	輸出(前年比)	10月	7.0%	4.6%	7.5%
11/1	輸入(前年比)	10月	2.2%	1.7%	2.2%
11/5	CPI(前年比)	10月	1.4%	1.3%	1.6%
11/13	失業率	10月	2.6%	2.7%	2.5%
11/20	PPI(前年比)	10月	-	1.0%	1.0%
11/26	消費者信頼感	11月	-	100.7	101.7
11/28	BOK政策金利	11月	3.25%	3.00%	3.25%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.00 ~ 33.00
TWD/JPY 4.35 ~ 4.90

東アジア資金部台北室 ヤン チェンロン

■ 先月の為替相場

11月のドル/台湾ドルは上昇した。

月初の11月1日は31.950でオープン。10月の米国非農業部門雇用者数の伸びは前月比+1.2万人の伸びにとどまり、事前予想を大幅に下回ったことに加え、8月と9月の雇用者数が合計11.2万人分、下方修正され、特に8月分が大きく下方修正されたため、海外市場ではドル売りが優勢な展開に。こうしたドル安の流れを受け、台湾ドル買いが進み一時31.90割れまで上昇した。しかし、その後米大統領選はトランプ候補が優勢との情報が伝わり、国際金融市場では米金利上昇・ドル高で反応したことで、台湾ドルは32.20近辺まで反落した。

月央になると、FRBは11月FOMCにおいて25bpの追加利下げを決定した。市場予想通り、9月の50bp利下げから利下げペースが減速したかたちとなった一方、声明文の変化は限定的に留まった。FRBのスタンスを確認した後、市場参加者は引き続き次期トランプ政権今後の財政・関税政策に注目。対中強硬姿勢やインフレ圧力の高まりに伴う米金利の高止まりに対する懸念から、アジア通貨に対しドルは引き続き堅調に推移し、台湾ドルは一時32.60台まで続落した。

月後半に入ると、米財務長官にヘッジファンド創業者のベッセント氏が指名されたことで、財政規律を重視する可能性が高まり、米長期金利の低下に伴い、為替市場ではドル高圧力が一巡し、台湾ドルの下値を支えた格好。その後月末にかけては、輸出業者による外貨売りが散見し、ドルは32.40-32.60でのレンジ推移となった。

■ 今月の見通し

12月のドル/台湾ドルはレンジ相場を見込む。

11月は次期トランプ政権誕生に対するリスク・センチメントの改善から、米ドル資産への資金シフトがさらに強まり、ドル高が進行し、ドル/台湾ドルは一時32.620まで上昇する展開となった。

12月のドル/台湾ドルについては引続き人民元をはじめとするアジア通貨の動き及び米金利動向を睨みながら、底値堅く推移する見込み。米トランプ次期大統領は、麻薬などの違法薬物の流入を理由に、米国が既存の全ての課税に加えて中国からの輸入品に10%の追加関税を課すことを表明。今後、こうした貿易摩擦がさらにエスカレートした場合、人民元安を誘発し、アジア通貨も軟調に推移するだろう。また、足元の米国経済は総じて堅調であることから、米金利の高止まりもドル買い材料となる見込み。一方、台湾における輸出の成長率はやや伸び悩んでいるものの、年末に向け、外貨売り需要は引続き好調となることを予想し、ドル/台湾ドルは下値がサポートされたレンジ相場となる予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

台湾といえば、やはり故宮博物院が最も有名だと思います。故宮博物院は台北市士林区の少し外れに位置しておりますが、台北駅から電車とバスを乗り継いで30分少々で行くことが出来る場所になっています。

非常に多くの作品が保管されており、その数実に69万点とも言われています。中でも有名な作品が翠玉白菜と肉形石です。翠玉白菜は天然の翡翠から彫り上げられた白菜のオブジェになっており、非常に精巧な作りになっています。また、肉形石はメノウ系の天然石から作られた豚の角煮のオブジェになっており、リアリティのある作品です。

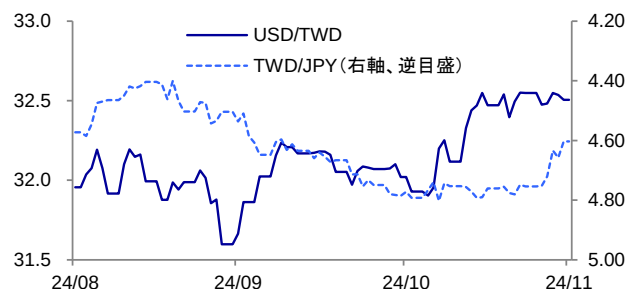
タイミングによっては他の美術館とのコラボをしていることもあります。私が以前行った時はバリ装飾美術館、Van Cleef & Arpelsとのコラボをやっており、非常に神秘的でした。

士林夜市も近くにあるので、帰り道にはそちらに立ち寄って観光をしていくことも出来るいい観光地になっています。

旅行でいらっしゃる方は、是非ご参考にして頂ければと思います。

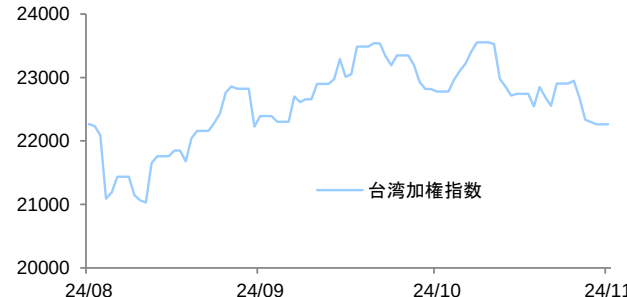
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	外貨準備高	10月	-	576.85B	577.93B
11/8	輸出(前年比)	10月	9.10%	8.40%	4.50%
11/8	輸入(前年比)	10月	8.90%	6.50%	17.30%
11/8	貿易収支	10月	6.30B	6.87B	7.12B
11/6	CPI(前年比)	10月	1.80%	1.69%	1.82%
11/20	輸出受注(前年比)	10月	3.80%	4.90%	4.60%
11/25	鉱工業生産(前年比)	10月	9.20%	8.85%	11.22%
11/22	失業率	10月	3.40%	3.38%	3.38%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7600 ~ 7.7950
HKD/JPY 19.10 ~ 20.30

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【11月の香港ドル直物相場】

米大統領選でトランプ氏が勝利した事を受けて米中関係の緊張が高まる中、香港ドル直物相場は7.78台へ再び下落。また、米国政策の不透明感が高まった事や、中国の景気刺激策への期待が後退した事を受けて外国人投資家は投資規模を縮小し、香港株の保有比率を引き下げた。一方で、明るい兆しもみられた。中国本土の投資家は香港株への投資を増加させたいと考えており、資金流入は7000億香港ドル近くに増大している。IPO（新規株式公開）市場の景気感も改善が続き、既に90億米ドル以上が調達されており、2023年の総調達額である59億米ドルを大幅に上回っている。経済指標に目を向けると、香港の第3四半期GDP成長率は前年同月比+1.8%を記録したものの、個人消費支出の弱さが明らかとなった。これを受けてGDP見通しを従来の前年比+2.5%〜+3.5%から同+2.5%に下方修正した。また、10月の総合CPI（消費者物価指数）の上昇率前年同月比+2.2%から+1.4%に低下した。

【11月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利はFRBの利下げペースの鈍化と香港ドル市場の流動性回復に伴い落ち着きを取り戻した。一方、ハンセン株式指数の1日の出来高は10月8日に記録した6200億香港ドルのピークから1500億香港ドル前後へと減少した。HKMAのアグリゲートバランスは450億香港ドル付近で低位推移する中、株式市場における決済需要が緩和したことで香港ドル市場の流動性は向上。地場銀行は引き続きディスカウント・ウィンドウ（中央銀行による割引貸し出し制度）で資金を確保しているものの、金額自体は減少している。11月にはFRBが25bpの利下げを実施したことを受け、地場銀行も最優遇貸出金利を同じく25bp引き下げた。2022年中旬以降の米金利の引き上げに合わせて貸出金利を引き上げる事に慎重だった方針を考えると、今回の25bp利下げに倣う形を取ったのは、意外な判断といえる。この決定の背景には、顧客向け商業不動産（CRE）ローンの貸し倒れを軽減し、与信の安定のためと考えられる。最優遇貸出金利とHIBORの調達コストの差は縮小傾向にあるものの、不動産市場が安定化すれば銀行の与信ポートフォリオは恩恵を受けるだろう。一方で香港政府は、インフレ率に連動する最低表面利率3.5%の個人向けインフラ債を発行すると発表した。ただし、表面利回りが4%を下回る事や、発行額がシルバーボンド（高齢者に対象を絞った公債）の550億香港ドルの半分以下であることから、投資家の需要は限定的であり、市場流動性への影響は軽微にとどまると予想される。

■ 今月の見通し

【12月の香港ドル直物相場】

FRB（米連邦準備制度）の利下げ姿勢により、香港ドルの下落は一服している。FRBの金融緩和サイクルが続けば香港ドル直物相場は引き続き7.75-7.8のレンジ内に留まると予想される。一方で、中国政府が米中貿易摩擦等の外的ショックに対抗するために景気刺激策の実施を再び加速させた場合、ハンセン株式指数は再び勢いを取り戻す可能性がある。また、香港の景況感の改善や不動産市場が安定化すれば企業への融資や住宅ローンの需要を下支えする事になり、香港ドル金利の上昇を通じて米ドルと香港ドルの金利差を中期的に縮小させるだろう。

【12月の香港ドル金利市場】

季節要因による香港ドル需給の増加とFRBの利下げペースの鈍化を考慮すると、年末に向けて香港ドル金利は上昇する可能性がある。また、IPO計画の増加や香港株の反発が進めば、香港ドル金利に更なる上昇圧力をもたらす事になるだろう。更に地場銀行の最優遇貸出金利の更なる引き下げが実現した場合は住宅ローンの需要が回復し、不動産市場を支える事で米ドルと香港ドルの金利差縮小に向かう展開も考えられる。加えて、香港株式市場の低迷が続く場合には取引バンド内の香港ドル高上限である7.75に達する時期が後ずれし、低位推移するアグリゲートバランスを背景に香港ドル金利が下支えられる可能性もある。

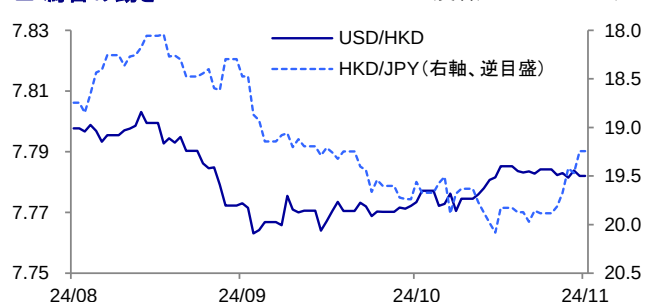
■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地で注目のアート、芸術事情』

香港のアートシーンは、伝統と現代的な表現が融合した独自の創造性に満ちた世界です。その象徴とも言えるのが「アート・バーゼル香港」と「大館Contemporary」です。アート・バーゼル香港は、世界中からアート愛好家やコレクターを引き寄せる国際的な現代アートの祭典です。多様な表現手法による作品が集結し、著名なアーティストだけでなく、新たな才能にも光を当てています。パネルディスカッションやアートについてのトークを通じ、現代アートのトレンドやその背景にある思想が共有され、ダイナミックな対話が生まれる場です。一方、大館Contemporaryは、歴史的建造物である大館の中に設けられた文化交流の中心地です。新進気鋭のアーティストや実力派による展覧会、インスタレーション、パフォーマンスが開催されており、幅広い芸術活動を楽しむことができます。このギャラリーでは歴史と現代アートが交差するユニークな空間で、訪れた人々は「創造性」を深く体験する事ができます。これらの場合は、香港のアートシーンの核として、多様性、革新性、文化の豊かさを体現しており、熟練のアート愛好家から初心者まで、誰もが新たな発見を楽しめ、常に大胆に進化し続ける現代アートの世界を垣間見ることができます。

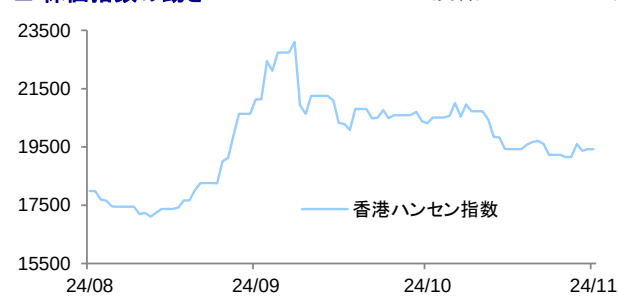
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/31	GDP（前年比）	3Q A	3.1%	1.8%	3.3%
11/1	小売売上高（価額、前年比）	9月	-9.0%	-6.9%	-10.1%
11/5	S&P Global Hong Kong PMI	9月	-	52.2	50
11/7	外貨準備高	10月	-	\$421.4b	\$422.8b
11/18	失業率（季調済）	10月	3.0%	3.1%	3.0%
11/21	CPIコンボジット（前年比）	10月	1.7%	1.4%	2.2%
11/26	輸出（前年比）	10月	6.7%	3.5%	4.7%
11/26	輸入（前年比）	10月	4.6%	4.5%	1.4%
11/26	貿易収支（HKD）	10月	-23.7b	-31.0b	-53.2b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.1300	～	7.3500
	CNY/JPY	20.00	～	21.73
	100JPY/CNY	4.6000	～	5.0000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

11月のドル人民元(USDCNY)は米大統領選挙を受けて上昇。

1日、USDCNYは7.11台でオープン。同日7.13台まで上昇する場面も見られたが、イベントを前に様子見の展開。

4日、7.10台前半でオープン。5日にかけては米大統領選を控えて小動き。6日、米大統領選の投開票が進む中でトランプ氏優勢の報道を受けてドル高が強まり、夜間取引で7.18付近まで上昇した。7日は調整が入り一時7.13台へ反落も、8日には再び7.18台まで上昇してクローズ。

11日、7.17台後半でオープン。週前半はドル買い元売り優勢で7.20を上抜け12日には一時7.24台まで上昇。米大統領選挙でトランプ氏が勝利を確実にしたことに加え、共和党が上下両院で多数派を確保するとの見方が強まり“トランプトレード”が再燃し、週を通して米金利上昇を背景にドルが全面高となる。また、中国景気の先行きや次期トランプ政権における対中姿勢も懸念され、USDCNYは14日に8月上旬以来となる7.24台後半まで上昇。ただ、週後半にかけては人民銀行仲値が7.19台に据え置かれたことでUSDCNYは上値重く推移し、15日7.22台後半でクローズ。

18日、7.23台後半でオープン。新規材料に欠ける中でフロー主導の相場展開。20日公表のLPRは事前予想通りの据え置きとなり、相場に対する反応は限定的。その後は7.24台を中心とした小動きとなり、週足では値幅が200pips程度と、動意に乏しい展開となった。

25日、7.24付近でオープン。7.19台で人民銀行仲値の設定が続く中、同日はレンジ内での推移。26日午前中、トランプ次期大統領が中国に対しては10%、メキシコ・カナダには25%の関税を課す案をSNSで発信したことでUSDCNYは7.25台後半まで上昇。27日は7.2470でクローズ。

■ 今月の見通し

USDCNYは双方向のリスクに警戒も、短期的には底堅い展開を予想。

米国大統領選挙を受けた“トランプトレード”により、選挙前7.10台を推移していたUSDCNYは7.25台へ大きく上昇した。1月20日の大統領就任日に向けて26日のような中米関係が懸念される動きが続き、USDCNYは引き続き緩やかに上昇する展開をメインシナリオとする。

一方、12月17-18日の日程で行われるFOMCにおいて利下げが実施されるか否かも焦点となりうる。27日現在、市場で織り込まれている12月利下げは約0.6回、2025年年末は約3.0回となっている。FOMC前に発表される雇用統計やCPIが予想を下回る結果となった場合、利下げの織り込みが進みドル安となる可能性にも注意しておきたい。また、FOMCで更新されるドットチャートにおいて、大統領選挙を受けて利下げ予想に変化があるかどうかにも注目したい。

中国サイドにおいては、米国に対する報復関税再燃が懸念されるものの、中国当局は、2017～2019年のような急激な通貨下落を許容するのではなく、財政拡大によって国内消費を支援することで関税の影響に対抗することも想定される。いずれにせよ元安圧力は高まるものの、そのスピードは抑制的と想定される上、足元は人民銀行仲値が7.19台に設定されていることから、2%上限である7.35レベルが一旦の上値の目途と考える。

短期的には不確実性の高い中米関係を材料とした不安定な相場変動が続くと考えられるものの、国内における経済刺激策等の発表にも留意しておきたい。例年12月には中央経済工作会议が開催されており、翌年の経済政策方針が決定されている。国内経済回復への期待感が高まることとなれば元高要因ともなりうるため内容には注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

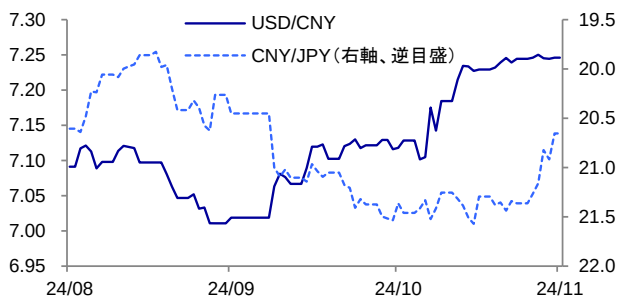
『当地で注目のアート、芸術事情』

少し前のデータながら、2018年の中国の美術市場の規模は米国、英国に次いで世界第3位となっているそう。確かに上海では大小多くの美術館や博物館、建築物がある印象です。また、街中のお洒落なバーに現代アートのような作品が飾ってあるのを見ることも多く、芸術への関心は高いと感じます。

そもそも、中国の芸術の歴史は古く、絵画や書道、陶磁器等の作品が数多く生み出され、日本にも伝来されています。上海で伝統的な芸術作品を鑑賞するのに一番おすすめなのが上海博物館です。上海博物館は故宮博物院、南京博物館と並び中国三大博物館に数えられ、展示館に約12万点もの収蔵品があるそう。博物館は無料で入場できますが、中は4階までとても大きく、全部じっくり見て回ると一日かかってしまうほど見応えがあります。常設展の他に企画展も開催されているので何度行っても飽きません。12月から中国への短期滞在ビザが免除されることが発表されましたので、上海へお越しの際は是非足を運んでみてください！

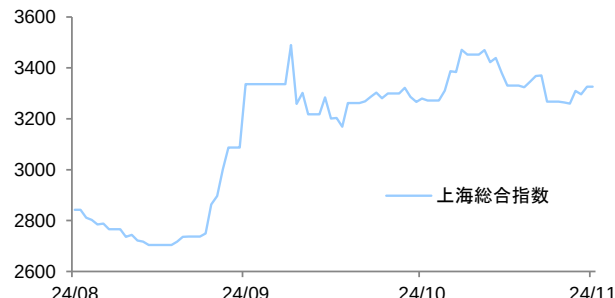
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/31	製造業PMI	10月	49.8	50.1	49.8
10/31	非製造業PMI	10月	50.3	50.2	50.0
11/7	貿易収支	10月	\$75.00b	\$95.72b	\$81.75b
11/9	PPI(前年比)	10月	-2.5%	-2.9%	-2.8%
11/9	CPI(前年比)	10月	0.4%	0.3%	0.4%
11/15	鉱工業生産(前年比)	10月	5.6%	5.3%	5.4%
11/15	小売売上高(前年比)	10月	3.8%	4.8%	3.2%
11/15	不動産投資(年初来前年比)	10月	-9.9%	-10.3%	-10.1%
11/20	LPR1年物	-	3.10%	3.10%	3.10%
11/20	LPR5年物	-	3.60%	3.60%	3.60%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3250 ~ 1.3600
SGD/JPY 110.00 ~ 116.00

アジア・オセアニア資金部 松本 彩花

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGDは上昇。
月初1日USD/SGDは1.32付近でオープン。同日に米10月雇用統計の発表があり、非農業部門雇用者数が市場予想対比大幅に下回ると一時金利低下で反応となったが、次週に米大統領選やFOMCを控えていることもあり為替相場への影響は限定的となった。5日、米大統領選開票日を迎え、トランプ氏優勢とのヘッドラインが伝わると米金利が急上昇。翌6日のアジア通貨は対ドルで弱含み展開となり、USD/SGDも1.33台前半まで上昇した。大統領選にてトランプ氏当選が確定すると、続いて6日-7日にはFOMCが開催された。市場予想通り25bpの利下げが決定され、パウエル議長からも特段踏み込んだ発言がなかったことからイベントを無難に通過。トランプ氏再選によるドル買いの流れも一服してか、USD/SGDは週末8日にかけて1.32台半ばまで水準を切り下げる展開となった。

12日、米共和党が下院でも過半数獲得が確実との報道を受けドル買いが優勢となると、USD/SGDは一時1.34付近まで上昇。その後も米金利上昇の流れからドル高地合いが継続し、14日パウエル議長より「利下げを急ぐ必要がない」との発言が確認されるとUSD/SGDは1.34台後半まで上昇。その後は新規材料待ちの状況となり、方向感乏しい展開に。

22日、シンガポール第三四半期GDP改定値が公表され、前年比+5.4%と速報値を上回る水準となったことでUSD/SGDは一時1.34台前半をつけるも影響は限定的であり、同日に節目である1.35を突破する格好となった。その後月末にかけてはトランプ氏による対外関税に関するヘッドラインやFRB高官による発言を受け相場が上下動する場面も見られたが、トランプ氏当選後のドル高地合いの調整もあってかUSD/SGDも1.34台前半あたりまで徐々に水準を戻した。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は底堅い値動きとなることを予想する。
前月は米大統領選・FOMCと重要なイベントが続いたが、トランプ氏再選や米利下げ織り込み剥落を受けUSD/SGDは上昇する展開となった。

今月もFOMCが予定されているが、直近FRB高官より利下げに対して慎重姿勢が示されていることや、トランプ氏の掲げる関税引き上げや移民政策等によるインフレ加速懸念が囁かれる中で、米利下げ織り込みは着実に後退しており、12月会合での追加利下げ有無に対する市場の予想は割れている状況。米10月CPIは前年比+2.6%と前回対比加速しており、米経済指標も直近底堅いデータが目立つことから、米利下げ織り込み剥落を材料としたドル買いの流れは今月も継続すると考える。追加利下げ有無を巡る新たな手掛かりとして、米雇用統計や米CPI等の経済データが判断材料の一つになると想定できるが、堅調な結果が示されればドル高方向への動きが強まる可能性にも警戒したい。

一方でシンガポールにおいては10月総合CPIが前年比+1.4%、コアCPIが前年比+2.1%と共に予想を下回り、特にコアCPIについては約3年ぶりの低水準となった。一部エコノミストからはMASが金融緩和を検討する余地ができたとの見方が示されているものの、MASは前回10月会合において現行の金融政策バンドは引き続き適切な水準とし6会合連続で金融政策の現状維持を決定した。金融政策変更について当局より具体的な情報発信は特段ないものの、欧米諸国に続きアジア諸国においても金融緩和に着手する国が出てきている中で、次回1月会合において今後の金融政策についてどのようなスタンスが示されるか注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』
シンガポールにも、様々な美術館や博物館があります。中でも、シンガポール最大規模の美術館といえば、“ナショナル・ギャラリー・シンガポール”です。総面積約64,000平方メートルの敷地の中に、19世紀から現代に至るシンガポールと東南アジアの絵画や彫刻、そして写真などを含む現代アートが展示されているそうです。

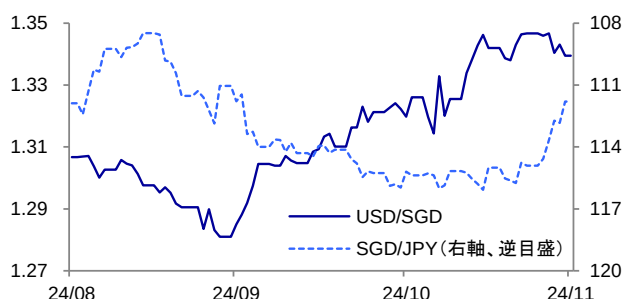
2015年にオープンした美術館なのですが、歴史的建造物である旧最高裁判所と旧市庁舎を外観そのままに改装して作られています。正面向かって左側のドームがあるのは旧最高裁判所で、ここには西暦3000年に開けられるというタイムカプセルが1階に埋められているそうです。また、右側の旧市庁舎は、1965年8月9日にリー・クアンユー初代首相がシンガポールの独立宣言を行った場所という歴史的にも重要な美術館となっています。旧市庁舎側はシンガポールのアートに特化しており、シンガポールのアーティスト作品を中心に鑑賞ができるようになっています。

当地にお越しの際は、“ぜひ”ナショナル・ギャラリー・シンガポール”にお立ち寄りいただき、シンガポールの独立宣言に耳を傾け、シンガポールアーティストの作品に触れていただければと思います。

(アジア・オセアニア資金部 甲斐 貴之)

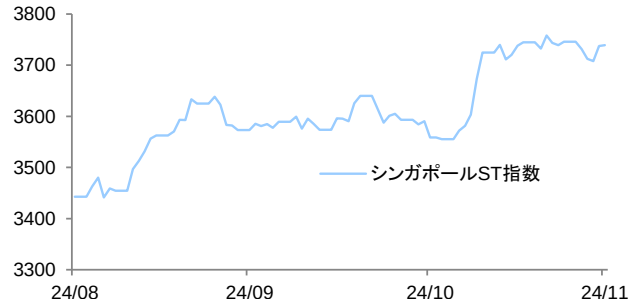
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	小売売上高(前年比)	9月	1.2%	2.0%	0.6%
11/18	非石油輸出(前年比)	10月	4.0%	-4.6%	2.7%
11/22	GDP(四半期)確報値	3Q	4.7%	5.4%	4.1%
11/25	CPI(前年比)	10月	1.8%	1.4%	2.0%
11/26	鉱工業生産(前年比)	10月	2.6%	1.2%	9.8%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.00 ~ 35.50
THB/JPY 4.35 ~ 4.50

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 リ チョンユエ

■ 先月の為替相場

11月のドルバーツは、米大統領選の結果を受け、序盤はドル高一辺倒となった。以降は月末にかけて一服する展開となった。

33バーツ台後半の水準で月初の取引を開始。弱い米10月雇用統計や、米大統領選に関する世論調査ではトランプ氏に明確なリードがないと示されたことを受け、ドル売りが先行したが、6日米大統領選の開票直後に、トランプ氏優勢に加え、上下院選挙も共和党優勢と報じられると、ドル買い優勢の地合いに。トランプ氏が当確となると、ドルバーツは34バーツ台前半まで上昇した。しかし7日に発表された米雇用関連指標が軟調な結果となったことを受け、34バーツを割り込んだ。その後FOMCにて予想通り25bpの利下げが決定されたほか、パウエル議長が記者会見で12月の追加利下げについて言質を与えなかったことから、再度34バーツ台前半まで値を戻した。

中旬は「トランプトレード」が続く中で、ドル高一辺倒の展開。12日に「トリプルレッド」達成が確認されると、34バーツ後半まで上昇。13日に発表された米10月CPIが市場予想通りの結果となったことを受け、一時下落する場面があったが、ドル高のトレンドは変わらず、徐々に35バーツ台へ上値を伸ばした。しかしその後は「トランプトレード」が落ち着く中で、ドルじり安展開に。18日にタイ第3四半期GDPが予想を上回ったことを受け、一時ドル売りが加速したが、下値を試す動きは限定的となった。しかし19日の海外時間にロシアとウクライナの紛争を巡る一連のヘッドラインを受け、リスク回避的なドル売りの動きが強まり、34バーツ台半ば付近まで下落。

下旬は地政学リスクが高まる中で、注目の経済指標の発表が少なく、米感謝祭休日も控えているから、ドルバーツが上値重く推移。25日にトランプ次期大統領が米財務長官にベッセント氏を起用との報道を受け、今後のインフレ抑制への期待感から、一時バーツ高に振れたが、その後は値を戻す展開となった。月末は34バーツ台後半で方向感なく推移し、本欄執筆時点では米感謝祭休日となる中で、34バーツ台半ば付近で推移している。

■ 今月の見通し

12月のドルバーツは底堅い値動きを予想するも、年末にかけては流動性の低下や「トランプトレード」のポジション調整による相場の急変に留意しておきたい。

総じて堅調な米経済指標が続く中で、パウエルFRB議長も繰り返して利下げを急がない姿勢を示している。12月のFOMCでは25bpの利下げを予想するものの、トランプ次期政権の財政拡大によるインフレが再燃する懸念から、2025年の利下げ回数は想定よりも低下すると考えられる。一方で、次期トランプ政権には様々な問題があるが、既に市場は一回トランプ政権を経験していることもあり、今回米国は利下げの過程であることなどを踏まえると、政策のインパクトが変わってくる可能性が考えられる。政策が判明するのにも相応の時間を要するため、足許はロシア・ウクライナ情勢が市場にリスク要因をもたらしているが、短期的にはドルが急速に売られる可能性が低いと考えられる。

タイ国内に目を向けると、デジタル通貨給付の第1弾が第3四半期末に実施されたほか、10月の中銀MPCがコロナ禍後初の利下げとなるため、家計消費をはじめとする内需を下支えする効果が判明するのにも相応の時間を要する。また、来年は米国の経済政策など外部要因によるリスクがさらに増えるため、タイ中銀が引き続き慎重な姿勢を維持すると想定され、12月のMPCで2回連続で利下げを実施する可能性が低いと考えられる。

以上を踏まえると、ドルバーツは底堅く推移を予想。但し、年末にかけて流動性が徐々に低下すると想定されるほか、ドル高一辺倒に一巡感が出てきたことを受け、「トランプトレード」のポジションに利益確定のフローが持ち込まれる可能性が考えられる。経済指標や中銀政策の発表やヘッドラインを受け、相場が急激に変動することに留意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

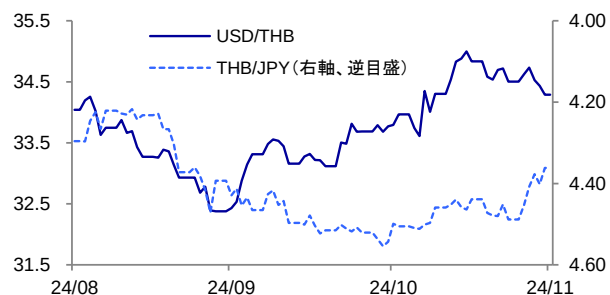
「タイシルク」はタイに古くから伝わる工芸品であり、世界中で愛されています。ファッション誌「VOGUE」に取り上げられるほど、高い人気を誇っている有名なブランドを挙げれば、「ジム・トンプソン(Jim Thompson)」という米国人のジム・トンプソンによって設立された手織りタイシルクの芸術品があります。

20世紀に入り、生活様式の変化や外国製の絹織物の流入を受け、タイの伝統的なシルク織り技術が衰退しつつありましたが、第二次世界大戦中にタイに派遣されたジム・トンプソンは、タイシルクの美しさに魅了され、産業としての復興を決意し、1948年に自らの名を冠したブランドを立ち上げました。オリエンタルな色味・柄や独特の光沢が特徴です。

現在、「ジム・トンプソン」はバンコク、パタヤ、プーケットなどに多数の店舗を展開しています。洋服は値が張りますが、ハンカチなどの小物は比較的買いやすい価格のため、ちょっと贅沢なお土産におすすめです。また、バンコク中心部にジム・トンプソンの生前の住居跡「ジム・トンプソンの家」が博物館として一般公開されており、タイの伝統的な建築や古美術コレクションの見学ができます。本格的なタイレストランも併設されており、旅行の際にぜひ訪れてみてください。

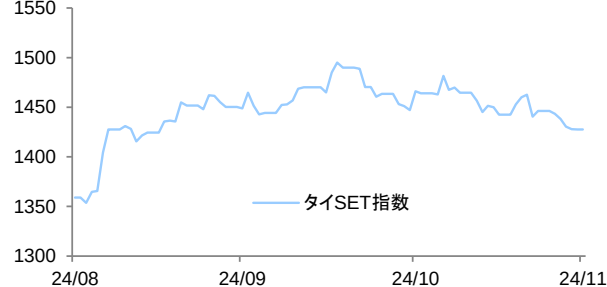
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/6	CPIYoY	10月	0.94%	0.83%	0.61%
11/6	CPIコアYoY	10月	0.80%	0.77%	0.77%
11/14	消費者信頼感指数	10月	-	56.0	55.3
11/25	自動車販売台数	10月	-	37,691	39,048
11/26	輸出(通関ベース)YoY	10月	5.1%	14.6%	1.1%
11/26	輸入(通関ベース)YoY	10月	6.4%	15.9%	9.9%
11/26	貿易収支(通関ベース)	10月	-\$402M	-\$794M	\$394M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.30	～	4.57
	MYR/JPY	33.50	～	34.90
	JPY/MYR	2.86	～	2.98

マレーシアみずほ銀行 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

11月は米大統領選挙の結果を受けてリング安が更に進んだ。4.36台後半で11月を迎えると、ハリケーン等の影響で弱い結果になるという事前予想乍ら、米10月雇用統計を警戒して4.38台へ上昇。但し、雇用者数変化が前月比+12千人と急減すると、週明けはドルが売られた。5日には4.34台まで下げたが、6日は米大統領選挙の開票が進むにつれてトランプ氏の勝利予想確率が上昇。これに連動するようにドル高が進み、大台の4.40を超えた。尚、同日実施された馬中銀MPCは選挙開票当日且つ現状維持だったこともあり、材料視されず。11月FOMC前に4.42台をつけたが、FRBが25bp金利引き下げを決めると一旦落ち着きを見せた。但し、更なるドル安となるには材料乏しく、4.38台中心に底堅く推移。

中旬は次期トランプ政権への不安から多くの新興国通貨が対ドルで軟調に推移。米祝日明け後にはトランプ氏の側近に関するヘッドラインが入り始め、それがトランプ氏への忠誠が高い人選だったことから、強硬な策が展開されるとの懸念が高まった。米長期金利の上昇もあり、リングの終値は11日から14日まで4日間上昇し続け、14日には4.49台へ。FRBパウエル議長の講演では、最新の確りした米経済指標を確認しているためか、利下げは急いでいないという発言がなされた。そのため、週末15日には再びリング安圧力が高まったものの、馬Q3GDPが速報値と変わらずの+5.3%で着地した他、週末を前に利食いも入りやすく、4.47近辺まで上げ幅を縮小。翌週は米金利が低下しながらもロシアが核兵器使用基準を緩和したとの報道や、FRB高官のタカ派発言があったことでドル指数は約7カ月ぶりの高水準をキープ。USD/MYRは4.47を挟んで推移。

下旬、NY連銀総裁が金利低下を予測する旨発言したが、影響は限定的で4.47付近で月末週へ渡る。トランプ次期大統領が中国やカナダ等を名指しし、追加関税を科すと発言してセンチメントが悪化するも、リングは小動き。FOMC議事録では追加利下げ示唆が確認されたほか、追加関税への警戒が漂う中でも中国の追加景気刺激策への期待から4.44台へと下落、そのまま米感謝祭を迎えると28日は狭いレンジで推移した。

■ 今月の見通し

12月のリング相場は上値は限定されながらも引き続き底堅い推移を予想する。

強い米9月雇用統計も幾分影響しているが、10月以降のトランプ大統領優勢の予想が現実となり、リングを含む主要アジア通貨は直近2カ月の期間で見るとトランプトレードの中、対ドルで下落した。馬経済については3QまでGDP確報値が発表され、足許までの通年経済成長率は約5.2%と10月に上程されている2025年予算案における見通しの上限5.3%に限りなく近いラップを刻んでいる。4Qも引き続き駆け込み需要とも呼べる米中向けの輸出等が見込まれると推測するため、輸出と堅調な内需を背景に4Qの馬経済も大きく崩れることなく着地しそうだと思っている。

加えて、現状の馬中銀のスタンスや2025年の物価見通しを踏まえると、米政策金利の利下げペースが鈍化すると市場では予想されているものの、方向感としては金利差が縮小する他、着実な馬貿易黒字の積み上げによってフロー面でリング買いが持続すると考えられる。ただし、トランプ2.0の開場を目前にしており、12月は馬で目立ったイベントも無いことから馬手動でリングが上昇する可能性は低く、あるとしても中国が追い込みで追加景気対策を発表し、それが好感されてのリング買いが限界と見る。

海外に目を向けると、米国の情勢はもちろん、政権交代を前に米国が関与度合いを引き上げたウクライナ情勢が地政学リスクとしてリングにとっては悪材料となる。また、年末に向けては米企業の決算期末が集中するタイミングでもあり、年末に向けて資金還流が起こりやすい環境となるため、ドル指数は大きく下げない可能性が高く、全体的にドルが確りと推移すると考えられる。

よって、馬には特段悪い材料が見られないというのは2Q以降継続している状況ではあるが、外部要因が招くドル高の方が強く、結果としてUSD/MYRが底堅く推移すると予想している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

注目のアートとして教えてもらったのは、マレーシアのアートシティと呼ばれているペナン島ジョージタウンのストリートアートです。リトアニア出身のアーティストが地元の人々をウォールアートで描いたことがきっかけで他のアーティストも更に多くの作品を描き、アートシティとして一気に有名になりました。

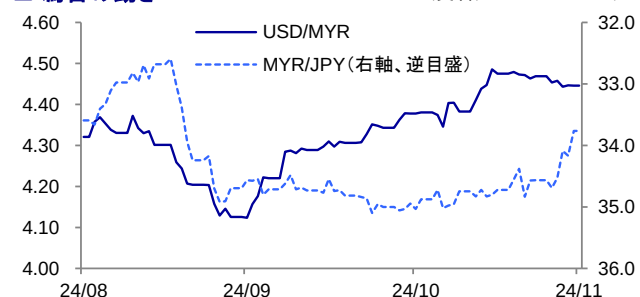
ウォールアート自体は決して珍しいものではないですが、西洋と東洋の文化が混じる独特の建物が建ち並ぶ中、その景観に溶け込むようなものもあれば、ビビッドな配色で視線を攫うようなアートもあり、そのジョージタウンの街並みとアートの融合が人々を惹きつけるようです。

特に有名なアートは、レトロな実物の自転車やバイクを使用したもので、それぞれ「Kids on Bicycle」と「Old Mortorbike」という名前がつけられています。また、有名になるきっかけを作ったリトアニア出身のアーティストの作品も壁ギリギリに設置されたブランコを活用したウォールアートが有名なようで、写真で見る限りでも非常にインパクトあるものでした。

これらはペナン州観光局が作成しているパンフレットにも掲載されていて、州お墨付きのアートとなっています。残念ながら、壁画ですので風雨に晒され徐々に色が薄くなっている様子。もし、ご覧になる機会がありましたら、その時のアートはその時しか見れない自分だけの1点ものとして、アート巡りをしてみてはいかがでしょうか。(偉そうに言っておりますが、筆者自身まだ見たことがありませんので、来年行ってみたいと思います)

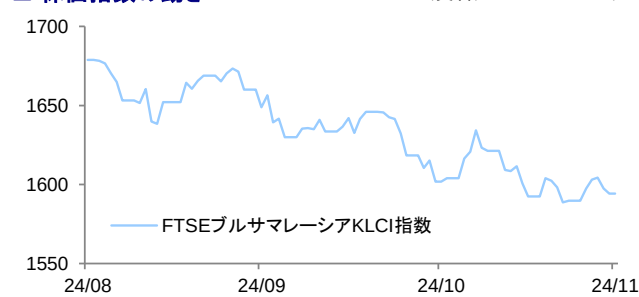
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	S&P Global PMI Mfg	Oct	-	49.5	49.5
11/6	BNM Policy Rate	-	3.0%	3.0%	3.0%
11/7	Foreign Reserves	Oct-30	-	\$117.6b	\$119.6b
11/8	Industrial Production YoY	Sep	3.5%	2.3%	4.1%
11/15	GDP YoY	3Q F	5.3%	5.3%	5.3%
11/19	Exports YoY	Oct	2.5%	1.6%	-0.6%
11/19	Imports YoY	Oct	4.0%	2.6%	10.9%
11/19	Trade Balance MYR	Oct	10.00b	11.98b	12.77b
11/22	Foreign Reserves	Nov-15	-	\$118.0b	\$117.6b
11/22	CPI YoY	Oct	1.8%	1.9%	1.8%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15700 ~ 16200
 IDR/JPY 0.9346 ~ 0.9709
 JPY/IDR 103.00 ~ 107.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

11月のルピアは下落。
 月初1日、ドルルピアは15700台前半で取引を開始。この日発表されたインドネシア10月消費者物価指数(CPI)の結果は前年同期比+1.71%となり、市場予想(同+1.66%)を上回る結果となったが前月対比下落し、中銀の定めるインフレ誘導目標(+1.5~3.5%)の下限近くの水準となった。この結果を受け、インドネシア中銀が追加利下げに動くとの見方が強まり15700台半ばまで小幅にルピアは下落した。翌週は米大統領選を控える中、15700台で方向感に欠ける値動きが継続。6日、開票速報が伝わるにつれトランプ氏優勢との見方が強まるとドル高で反応し一時15800台半ばまでドル高・ルピア安が進展した。翌7日海外時間に行われたFOMCでは大方の事前予想通り▲0.25%の利下げが決定された。これを受け、翌8日のドルルピアは15600台半ばまでドル安が進展して取引を開始したが、アジア時間日中にはドル買い戻しの動きも見られ15600台後半までルピアは反落。翌週11日、週末に行われた中国の全人代常務委員会の会見において、期待されていた追加の景気刺激策は発表されず失望感からアジア通貨が軟調に推移。ルピアも15600台後半までドルで下落幅を拡大させた。12日、米下院において共和党が過半数を獲得する見通しとの報道を受け、ドルルピアは15800近辺までドル高が進展。13日海外時間に発表された米10月CPIの結果を受け市場は小幅にドル安で反応するも、ドル高の流れは変わらず翌14日アジア時間のドルルピアは15800台後半をつけた。その後、15800台を中心としたレンジで推移。20日に行われたインドネシア中銀会合では政策金利の据え置きが決定された。事前予想では一部で利下げを見込む向きもあったが、発表後の為替市場の反応は限定的となった。その後はロシアが核兵器使用基準を緩和したとの報道を受けリスク回避的な値動きが強まったことや、FRB高官のタカ派発言を受けたドル高の流れを受けルピアは下落し、21日には一時15900台半ばを付けた。15900台では上値の重さを感じられる値動きが継続。イスラエルとレバノンの停戦合意との報道を受け15800台半ばまで下げ幅を縮小させる局面も見られたが、月末にかけては実需のルピア売り圧力も強まり再度15900台にのせ、同水準でクローズした。

■ 今月の見通し

12月のルピアは軟調な値動きを予想。
 11月のルピアは米大統領選の結果を受けドル高が進展する中で下落し、8月ぶりに15900台を付けた。インドネシア中銀は一部で利下げが期待されていた中で、政策金利の据え置きを決定。ドル高、ルピア安が進む中、為替水準に配慮した決定だと考えられる。
 11月1日に発表されたインドネシアの10月CPIの結果は市場予想を上回る結果となり、コアCPIも前年比+2.21%と前月から伸びが加速した。しかしながらコアCPIの上昇は金価格の高騰が影響しており、自動車販売が不振であることから個人の消費意欲が高まった結果とは考えにくい。インドネシア中銀としては、利下げを行い国内経済へデコ入れを行いたいと考えられる一方、「通貨の安定を優先する」との姿勢を維持する中、追加利下げ決定には慎重にならざるを得ないか。
 米国では、堅調な経済指標結果が続いており、12月FOMCにおいて利下げしないとの見方も強まってきている。このような状況下、引き続きドル高で推移しやすい環境が続くと考えられ、ルピアもドルで軟調な値動きが継続しよう。
 インドネシア中銀は「利下げしたいが、通貨安を気にして利下げできない」状況に追い込まれつつある。今年4月には通貨安に対応するため、利上げを行った。この時、ペリー総裁は年末にかけルピア高が進み第四四半期には15800程度で推移するとの見方を示していた。このことから、15800を上回る水準では利下げは行いにくいと考えられ、12月も利下げは難しくなるものと考えられる。
 ドル高の流れが継続する内は、利下げを打ち止めし、為替介入によってルピア安に対抗するものと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

バティック

ワックス防染技法を用いたバティックは、ユネスコによって無形文化遺産として認められた当地の象徴的な芸術形態です。ジョグジャカルタ、ソロ、ペカロンガンなどの地域は、自然、神話、哲学にインスピレーションを得た独特のバティックパターンで有名です。バティックは単なる芸術形式ではなく、人々の生活に深く根付いた文化的表現でもあります。

デヤンとソンケット

デヤン(織物)やソンケット(金属糸で織ったもの)などの当地の織りの伝統は、その複雑な模様と儀式的な重要性で称賛されています。スンバ、バリ、スマトラなどの地域はこれらの織物で有名で、それぞれがデザインを通じて独特の文化的アイデンティティを示しています。

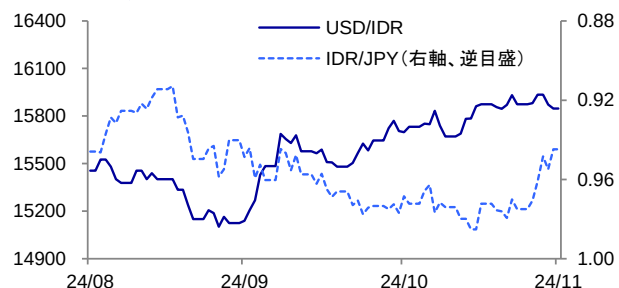
木彫と石の彫刻

バリ島の精巧な木彫からトラジャ族の祖先の像(タウタウ)まで、職人技は織物だけにとどまりません。これらの芸術形態は深く象徴的で、多くの場合、精神的な信仰や地元の物語を表現しています。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

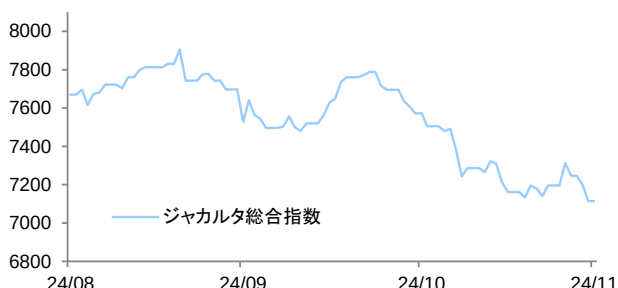
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	CPI(前年同月比)	10月	1.66%	1.71%	1.84%
11/5	GDP(前年比)	3Q	5.00%	4.95%	5.05%
11/15	貿易収支(USD M)	10月	3,080	2,475	3,231
11/15	輸出(前年比)	10月	3.47%	10.25%	6.31%
11/15	輸入(前年比)	10月	7.18%	17.49%	8.55%
11/20	BI 金利	-	6.00%	6.00%	6.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 57.50 ~ 59.50
JPY/PHP 0.380 ~ 0.400

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【11月のドルペソ相場は、恐る恐る年初来のペソ安値を探る展開】

11月初のドルペソ相場は、1米ドル＝58.27ペソで開始。11月5日に発表された比10月物価統計は、概ね予想通りの結果。前年比で+2.3%（予想+2.3%、前回分+1.9%）、前月比で+0.2%（予想+0.3%、前回▲0.2%）となった。比中銀からのコメントでは、「ターゲットレンジ（+2.0～4.0%）の下限近辺で推移しており、金融緩和サイクルは維持する見込み（12月の利下げを示唆）」。「しかしながら、2025年から2026年にかけては資源やエネルギー価格、賃金上昇の動向を勘案すると、物価上昇圧力が高まる可能性がある」との見解を示した。その後、直前まで拮抗していた米大統領選だったが、徐々に進む投票でトランプ氏勝利の見方が強まり始めると、今後の政策、景気拡大への期待感からグローバルにドルが買われ、ドルペソ相場も58.80近辺までペソ安が加速した。

11月中旬に差し掛かり、ドル買い圧力が弱まる場面では、58ペソ台前半まで小緩んだが、11日公表の比7～9月期GDPは、前年比+5.2%（予想+5.7%、前回+6.4%）。5四半期ぶりの低水準となった事で再び58ペソ台後半まで上昇した。度重なる台風などの悪天候による一部政府歳出の遅れや農業への影響との声もあるが、今後もフィリピン経済の下支えを目的とした政策金利の引き下げ期待が高まった。

下旬に入ってから、上値を試しに行く動きを見せながらも、重たさを確認して反落する事を繰り返す展開が続く中、遂に59ペソちょうどを示現。しかしながら、トランプ次期大統領による、関税政策強化による世界経済への影響を懸念したグローバルなドル売りに引っ張られ、結局58ペソ台半ば近辺まで下落して11月を終えた。

■ 今月の見通し

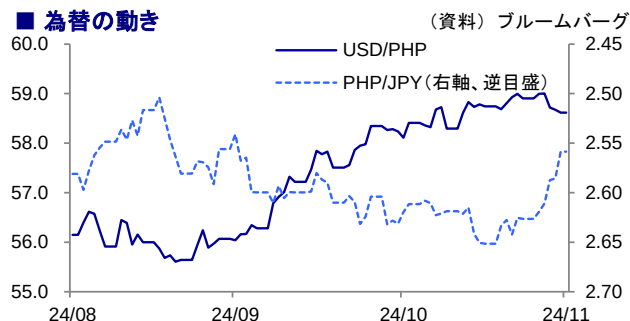
【12月は年初来のペソ安値を超えられるかどうか】

11月中頃にパウエルFRB議長は、「利下げを急ぐ必要性はない、経済は目覚ましく良好」との認識を示した事で、一部市場参加者の間で12月FOMC会合での利下げ観測が後退し始めた。その後、11月下旬に入ってから、レモロナ比中銀総裁のコメントのトーンが若干変化。従来、12月も▲0.25%の政策金利の引下げを示唆していたが、米国動向を意識してか据え置きも選択肢にある、と含みを持たせるようになった。米比ともに12月中旬に次回金融政策決定会合を控え、データ次第とコメントする両国の物価、雇用に関する統計は12月上旬に発表予定。結果如何で慌ただししい値動きをもたらすであろう。11月終盤にかけて、ドルペソ相場は59ペソちょうどを離れ、やや小緩んだが、引続き59ペソ超えを狙える射程圏内にある。

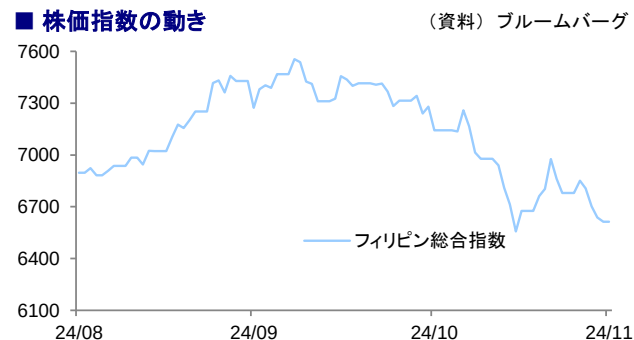
また、トランプ氏の大統領選勝利以降、今後の減税や規制緩和等の政策および物価上昇圧力の再燃を意識して、米長期金利が上昇。その結果、グローバルにドル買い優勢の地合いが復活している。一方で関税強化による懸念はドル売りの流れをもたらした。次期大統領の政権運営開始まで2か月弱あるが、12月にかけても引き続き、政策方針などの考えが示される都度、相場を動かす材料となるであろう。

12月は月を通して神経質な値動きとなるだろうが、総じて見るとドル高ペソ安圧力の方が強そうだ。抵抗線の59ペソを超えられるかどうか、比中銀からのコメントにも注目が集まる。米比の経済指標結果、トランプ氏発言次第で予想レンジの上下限の中で大きくスイング（往来）する事もリスクシナリオとして、想定しておきたい。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 83.60 ~ 84.50
INR/JPY 1.77 ~ 1.91

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【11月の米ドル/インドルピーは節目84半ばを超えるルピー安に】

84台前半水準にて当月取引を開始。月初については、USD高圧力に連れられる恰好で緩やかなルピー安の展開。その後、月央については、84.40水準付近にて実需勢のフローも相俟って、当該水準での横這い推移が継続。月末にかけては、節目である84半ばを局所的に上方にブレイクする値動きを見せるも、インド準備銀行(RBI)からの上値抑えの為替介入(USD売り・INR買い)がしっかり発動され、過度なルピー安への抑制・牽制を強めている状況となり、一部調整局面を経て、結局、84台前半水準でのクローズとなった(25日時点)。

SENSEXは、月初は79,500水準近傍でスタート後、米国株高の流れに追随し、再び80,000水準を回復。その後は、79,500水準での横這い推移が継続するも、月央にかけて、じりじりと値を下げる展開に転じ、77,000近傍まで値を下げる。アダーン関連報道で、下押し圧力が強まる見方が広がるも、総じて売り優勢の流れは一服し、月末にかけてはむしろ反発して上昇する展開となり、再び80,000台に回復してクローズとなった(25日時点)。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、11月単月は未だ売り越し優勢も、10月からの勢いは衰えてきており、資金流入回帰の流れが復活するか、注視していく必要あり。

インド経済指標では、10月製造業/サービス業PMIは前回対比で良化する結果に。10月消費者物価指数(CPI、前年比)は+6.21%と、前回の+5.49%から上昇し、インフレターゲットの上限である6.0%を再び超える展開。10月貿易収支は赤字幅は拡大し、引き続き赤字体質は常態化。通貨として弱い立ち位置は不変。

■ 今月の見通し

【12月の米ドル/インドルピーは調整局面、節目84水準での攻防か】

12月においては、調整局面を迎えた後、節目84水準での攻防を見込む。11月は、節目84半ば水準までの緩やかなルピー安の流れを確認したもの、当該水準からRBIからの上値抑えの為替介入に伴って、急速に値を戻している状況。引続き、RBIからのアンダーコントロールが奏功することで、過度な値動きは抑制されていく前提の中で、一部では、RBIより複数銀行に対してロングポジション(USD買いINR売り)の削減を指示しているとの報道もあり、しばらくは上値重く調整局面が継続する想定であるも、節目84水準近傍での実需勢のフローおよびRBIからの下支えの為替介入(USD買いINR売り)が再開されていくのか、留意しておきたい。

10月CPIは、前回対比で上昇する結果となり、インフレターゲットの上限である6.0%を再び上回る展開。ベース効果剥落に伴ったものと想定されるが、引き続き真のデイスインフレ進展がなされていくのかを、未だ確認していくフェーズとの認識。斯かる中、ダスRBI総裁からも「現時点での利下げは非常に時期尚早」とのコメントも示唆されていることもあり、メインシナリオの利下げ局面入りという方向感は崩していないものの、利下げ時期の後ろ倒しの可能性は徐々に高まっていると考える。

11月は、インド株・インド債券への投資資金流入については、売り越しの流れが続いているも、10月からの勢いは衰えており、徐々に上昇基調に戻りつつある状況。米利下げに伴うUSD売り圧力でのルピー高といったシナリオは描いているものの、市場への織り込み度合を勘案すれば、USD売りインパクトは想定程ではないかつ、むしろ期待感の剥落から反発の可能性も。過度なルピー高となる際のRBIからの下支えの為替介入および実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)が奏功することで、緩やかなルピー安回復というメインシナリオも、米大統領選挙を経た米国資金流入の再開も相俟って、ルピー安進行がスピード感を以て達成されていく場合は、先月同様に、RBIからの上値抑えの為替介入の発動に伴って、抑制されていく見込み。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で注目のアート、芸術事情』

インドのアート、芸術は多岐にわたっており、また地域によって多種多様な芸術が存在することから、こちらでご紹介するのは本当に難しいです。また、多くの点で宗教的で、また古代の叡智であるヴェーダから発展しているものが多く、哲学的に考えさせられるものも多くあり、本当に尊敬しています。

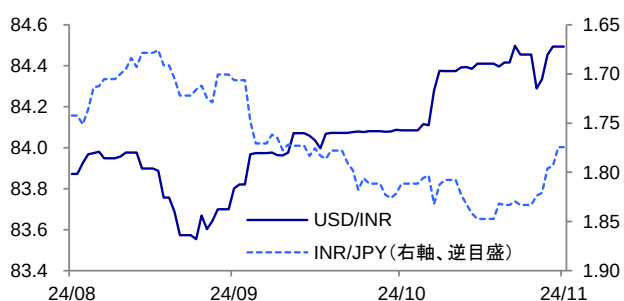
例えば、インドのドレミファソラシドはサレガマパダニサといいますが、一つ一つの音に固有の神様が宿っていて、どういった意味をなしているのかなど、かなり細かく理論があり一つ一つに意味があります。私はこれ以上ご説明できませんので、ここで一つ、とても有名な音”

ॐ(オーム)”について簡単に触れたいと思います。たくさんさんの説がありますが、オームはA,U,Mの3つの音より構成されており、それぞれ“A”はBrahma(創造の神)、“U”はVishnu(維持の神)そして“M”はMaheshwara(破壊の神)を意味し、オームという一つの音で世界そのものを表します。そして、NASAが記録した太陽の音とこのオームの音はかなり類似しており、インドの古代聖者はいち早くこの音を認知し、様々な場面で活用していたといわれています。

さて、話題を変えて、インドを訪れたことのある方は何度も宗教画や神様の銅像を目にされたかと思います。皆、特徴的なパッチリの美しい目をされています。何年も前に12月ごろマーケットを歩いていた時、クリスマスの飾りが目にとまりまして、ふとサンタの飾りを見たところ、サンタの目まであの麗しい美しい目に変換されていたのは衝撃的でした。本当に笑ってしまいました。12月にインドを訪れる予定のある方は、是非マーケットでのひととき美しい目を持つサンタを探してみてください。

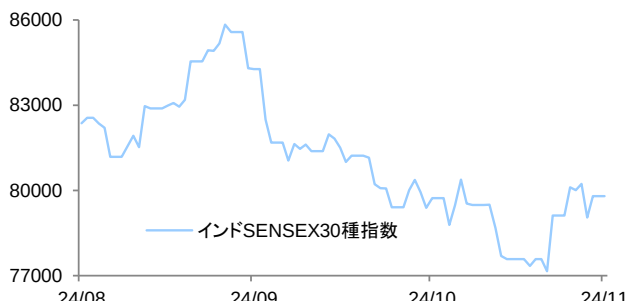
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

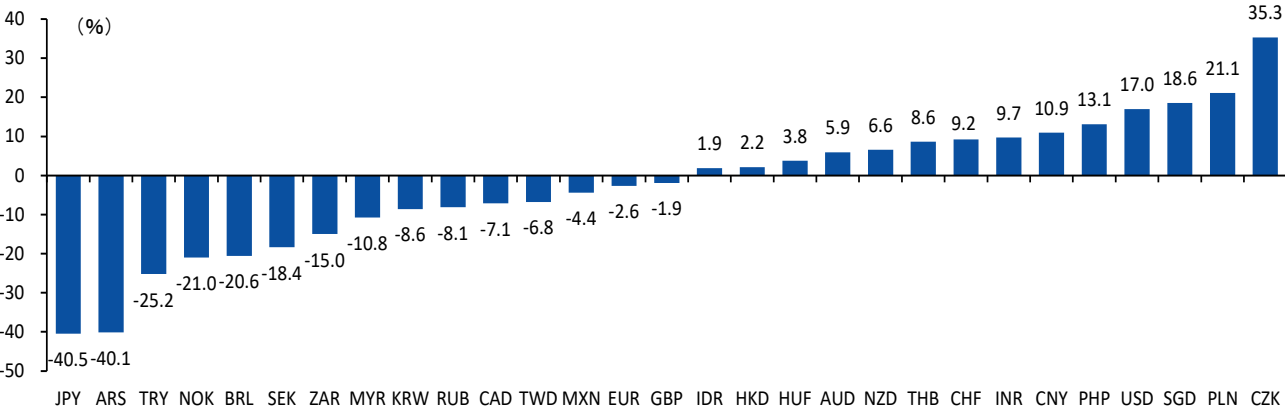
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/4	製造業PMI	10月	-	57.5	56.5
11/6	サービス業PMI	10月	-	58.5	57.7
11/12	鉱工業生産	9月	2.50%	3.10%	-0.10%
11/12	CPI	10月	5.90%	6.21%	5.49%
11/15	貿易収支(百万ドル)	10月	-22,000	-27,142	-20,781

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年11月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年11月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	44910.65	19.2%	-
日本	USD/JPY	141.04	149.77	6.2%	日経平均株価	33464.17	38208.03	14.2%	7.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.0577	-4.2%	ドイツDAX指数	16751.64	19626.45	17.2%	17.2%
英国	GBP/USD	1.2731	1.2735	0.0%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	8287.3	7.2%	7.1%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.6512	-4.4%	S&P/ASX200指数	7590.818	8436.231	11.1%	16.3%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.4006	5.8%	S&PTロント総合指数	20958.44	25648	22.4%	15.7%
エマーGINGアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.246	2.1%	上海総合	2974.935	3326.456	11.8%	9.6%
香港	USD/HKD	7.8115	7.782	-0.4%	香港ハンセン	17047.39	19423.61	13.9%	14.4%
インド	USD/INR	83.2088	84.4937	1.5%	インドSENSEX30種	72240.26	79802.79	10.5%	8.8%
インドネシア	USD/IDR	15399	15848	2.9%	ジャカルタ総合	7272.797	7114.266	-2.2%	-5.0%
韓国	USD/KRW	1291.07	1397.29	8.2%	韓国総合株価	2655.28	2455.91	-7.5%	-14.5%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.446	-3.2%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1594.29	9.6%	13.2%
フィリピン	USD/PHP	55.385	58.615	5.8%	フィリピン総合	6450.04	6613.85	2.5%	-3.1%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.3395	1.5%	シンガポールST	3240.27	3739.29	15.4%	13.7%
台湾	USD/TWD	30.579	32.505	6.3%	台湾加権	17930.81	22262.5	24.2%	16.8%
タイ	USD/THB	34.256	34.288	0.1%	タイSET	1415.85	1427.54	0.8%	0.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2024年10月時点)



■ 実質GDP成長率

	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.8	2.4	4.4	3.2	1.6	3.0	2.8	2.5	2.9
日本*	5.0	2.6	-4.0	0.4	-2.4	2.2	0.9	1.2	1.7
ユーロ圏	1.4	0.5	0.0	0.1	0.5	0.6	0.9	3.5	0.4
英国	0.9	0.5	0.3	-0.3	0.3	0.7	1.0	4.8	0.3
豪州	2.2	1.9	2.1	1.6	1.3	1.0		3.9	2.0
カナダ*	3.9	0.8	-0.6	0.7	2.0	2.2	1.0	4.2	1.5
エマージングアジア									
中国	4.5	6.3	4.9	5.2	5.3	4.7	4.6	3.0	5.2
香港	2.8	1.6	4.2	4.3	2.8	3.2	1.8	-3.7	3.3
インド	6.2	8.2	8.1	8.6	7.8	6.7	5.4	9.7	7.0
インドネシア	5.0	5.2	4.9	5.0	5.1	5.1	5.0	5.3	5.1
韓国	1.1	1.0	1.4	2.1	3.3	2.3	1.5	2.7	1.4
マレーシア	5.5	2.8	3.1	2.9	4.2	5.9	5.3	8.7	3.7
フィリピン	6.4	4.3	6.0	5.5	5.8	6.4	5.2	7.6	5.5
シンガポール	0.5	0.5	1.0	2.2	3.0	3.0	5.4	3.9	1.1
台湾	-3.5	1.5	1.6	4.7	6.6	4.9	4.2	2.7	1.1
タイ	2.6	1.8	1.4	1.7	1.6	2.2	3.0	2.5	1.9

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	24/03	24/04	24/05	24/06	24/07	24/08	24/09	24/10	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.8	3.9	4.0	4.1	4.3	4.2	4.1	4.1	3.6	3.6
日本	2.6	2.6	2.6	2.5	2.7	2.5	2.4	2.5	2.6	2.6
ユーロ圏	6.5	6.4	6.5	6.4	6.4	6.3	6.3		6.8	6.6
英国	4.3	4.4	4.4	4.2	4.1	4.0	4.3		3.9	4.0
豪州	3.9	4.1	4.0	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	3.7	3.7
カナダ	6.1	6.1	6.2	6.4	6.4	6.6	6.5	6.5	5.3	5.4
エマージングアジア										
中国										
香港	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.1	4.3	3.0
インドネシア						4.9			5.9	5.4
韓国	2.8	2.8	2.8	2.8	2.5	2.4	2.5	2.7	2.9	2.7
マレーシア	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2		3.8	3.4
フィリピン	3.9	4.0	4.1	3.1	4.7	4.0	3.7		5.4	4.4
シンガポール	2.1			2.0			1.8		2.1	1.9
台湾	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ	1.0			1.1					1.3	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	24/02	24/03	24/04	24/05	24/06	24/07	24/08	24/09	24/10	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	3.2	3.5	3.4	3.3	3.0	2.9	2.5	2.4	2.6	8.0	4.1
日本	2.8	2.7	2.5	2.8	2.8	2.8	3.0	2.5	2.3	2.5	3.3
ユーロ圏	2.6	2.4	2.4	2.6	2.5	2.6	2.2	1.7	2.0	8.4	5.5
英国	3.4	3.2	2.3	2.0	2.0	2.2	2.2	1.7	2.3	9.1	7.3
豪州		3.6			3.8			2.8		6.6	5.6
カナダ	2.8	2.9	2.7	2.9	2.7	2.5	2.0	1.6	2.0	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	0.7	0.1	0.3	0.3	0.2	0.5	0.6	0.4	0.3	2.0	0.2
香港	2.1	2.0	1.1	1.2	1.5	2.5	2.5	2.2	1.4	1.9	2.1
インド	5.1	4.9	4.8	4.8	5.1	3.6	3.7	5.5	6.2	6.7	5.7
インドネシア	2.8	3.1	3.0	2.8	2.5	2.1	2.1	1.8	1.7	4.2	3.7
韓国	3.1	3.1	2.9	2.7	2.4	2.6	2.0	1.6	1.3	5.1	3.6
マレーシア	1.8	1.8	1.8	2.0	2.0	2.0	1.9	1.8	1.9	3.4	2.5
フィリピン	3.4	3.7	3.8	3.9	3.7	4.4	3.3	1.9	2.3	5.8	6.0
シンガポール	3.4	2.7	2.7	3.1	2.4	2.4	2.2	2.0	1.4	6.1	4.8
台湾	3.1	2.2	1.9	2.2	2.4	2.5	2.4	1.8	1.7	3.0	2.5
タイ	-0.8	-0.5	0.2	1.5	0.6	0.8	0.4	0.6	0.8	6.1	1.3

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.5	-3.4	-3.3	-3.2	-3.2	-3.3		-3.9	-3.3
日本	1.6	2.2	3.2	3.8	4.5	4.6	4.7	2.0	3.8
ユーロ圏	0.1	0.5	1.3	1.7	2.1	2.5		0.0	1.7
英国	-1.1	-1.1	-1.2	-2.0	-1.9	-2.2		-2.1	-2.0
豪州	1.0	0.6	0.4	0.3	-0.2	-0.7		0.9	0.3
カナダ	-0.6	-1.0	-1.0	-0.6	-0.6	-0.5		-0.3	-0.6
エマージングアジア									
中国	2.4	2.3	1.8	1.5	1.2	1.2	1.6	2.5	
香港	9.0	9.4	8.8	9.2	10.8	12.2		10.2	9.2
インド	-2.0	-1.7	-1.1	-0.9	-0.7	-0.7		-2.4	-0.9
インドネシア	1.2	0.6	0.2	-0.2	-0.6	-0.6	-0.7	1.0	-0.2
韓国	0.3	0.1	1.0	2.0	3.2	4.0		1.4	1.9
マレーシア	3.5	3.7	3.1	1.6	1.8	1.5	1.2	3.2	1.6
フィリピン	-4.4	-3.3	-2.4	-2.6	-2.0	-2.3		-4.4	-2.6
シンガポール	18.2	18.2	18.5	19.8	20.3	20.2	19.8	18.0	19.8
台湾	12.2	12.1	12.9	14.0	15.2	14.9	14.3	13.3	14.0
タイ	-2.4	-1.4	0.8	1.5	1.3	2.0		-3.5	1.5

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	4.50-4.75	緩和: 2024/9/18	5.25-5.50	2024/11/7	-25bp	2024/11/7	-25bp
日本	当座預金残高の政策金利	0.25	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2024/7/31	+15bp	2024/10/31	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.25	緩和: 2024/6/6	4.00	2024/10/17	-25bp	2024/10/17	-25bp
英国	バンク・レート	4.75	緩和: 2024/8/1	5.25	2024/11/7	-25bp	2024/11/7	-25bp
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2024/11/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	3.75	緩和: 2024/6/5	5.00	2024/10/23	-50bp	2024/10/23	-50bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.10	緩和: 2012/6/8	6.31	2024/10/21	-25bp	2024/11/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2024/10/9	現状維持
インドネシア	BI金利	6.00	緩和: 2024/9/18	6.25	2024/9/18	-25bp	2024/11/20	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.00	緩和: 2024/10/11	3.50	2024/11/28	-25bp	2024/11/28	-25bp
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/11/6	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.00	緩和: 2024/8/15	6.50	2024/10/16	-25bp	2024/10/16	-25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/3/21	+12.5bp	2024/6/13	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.25	緩和: 2024/10/16	2.50	2024/10/16	-25bp	2024/10/16	-25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行